傭兵と決闘者の協奏曲

デボエンペラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵と決闘者の協奏曲

【Ｎコード】

Ｎ３１００Ｘ

【作者名】

デボエンペラー

【あらすじ】

ＳＥＥＤ事変から3年後のグラール太陽系、そこでは亜空間研究のほかにあるカードゲームが流行していた。だがそのカードゲームは旧文明から伝わる決闘の儀式でもあり、それを知っていた異能者の集団があった。一人の異能者が依頼で海底レリクスの調査を行っていた際、あるカードを手にした時物語は始まった。

傭兵と少女の邂逅

それは遥か遠いところのお話――
母なる太陽と三つの惑星を持つグラール太陽系――
そこに住む『ヒューマン』と彼らから生まれた『キャスト』『ニューマン』『ビースト』は、外宇宙から飛来した『ＳＥＥＤ』による襲来を受け、滅亡の危機を迎えた。
しかし、四つの種族は心を一つにして戦い、激しい攻防の末、これを封印した。

それから三年後。

近年グラールで流行しているカードゲーム『デュエルモンスターズ』や今まで自粛されていたスポーツや芸能関係の番組の再開等の影響もあり、グラールに活気が戻ってきつつあった。
しかしその影ではＳＥＥＤとの攻防の傷跡が未だに深く刻まれ、資源枯渇が深刻な問題になっていた。
外宇宙への移動を可能とする『亜空間航行理論』が提唱され、再興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。
政府・軍・三惑星中の企業は結束し、『亜空間航行』への実現化へ向けて動き出していた。

グラールの新しい未来を願って……

「……分かりました。ではしばらくお待ちください」

パルムに存在する高層ビルに訪れた私は受付嬢にそう言われてロビーのソファーに座ると、手の甲に装着させていたナノトランサーを起動させて旧文明について書かれた書物を手にしてページをなぞるようにして読み始めた。

「……」

旧文明の遺跡『レリクス』にそこに存在する機動兵器『スタリティア』、そしてＳＥＥＤ事変最終決戦の地となったＳＥＥＤに汚染されたレリクス『リュクロス』……リュクロスは完全な『合の時』に消滅したものの、それでもレリクスは未だに数多く存在している。

「……やはり興味深いな」

今の子供たちがイーサン＝ウェーバーの英雄譚に憧れるように、私は現在のグラールで再現できない旧文明の技術の数々に心惹かれている。

グラールに住むヒトの素となったヒューマンが他の三種族を作り上げたと言うのに、レリクスが持つ封印装置などの技術は今の技術を持ってしても再現できていないのだ。

近年流行しているカードゲームも、流行した切欠は旧文明が持つ技術の再現に成功したからと言う理由であり、『それ』が無かった時代は単なる知る人ぞ知る物にしか過ぎなかったのだ。

閑話休題。

「近年旧文明の技術も少しずつ解明されて来ている……出来るなら全て解明されるまで生きていたいがな……それに最近新たに――」

「お待たせしました。社長がお会いになられるようです」

感嘆の声を上げる中で先程の受付嬢が声を上げると、私は読んでいた本を閉じて腰を上げた。

「ありがとうございます」

そう言って私は足を進め、転送装置に乗ると係の者が装置を操作すると私の周りの景色が消滅すると、次の瞬間には別の景色に変わっていた。その先には赤いラインが特徴的な扉があり、私は迷わず

声を上げた。

「私です。入ります」

その声に反応したのか扉のラインが緑色に変わって音を立てて開かれる。その最奥に高価なスーツを着た黒髪の男がおり、彼は窓からパルムの町並みを見下ろしていた。

「来たか」

彼の言葉を合図に私は礼をして頷く。その一方で彼は私に向かって声を上げた。

「海底レリクスが新たに発見されたのは知ってるな？」

その言葉を聞き私は頷く。その一方で彼は目つきを鋭くさせて私に向かい声を上げた。

「……一番新しいウォザーブルグ動乱とウォザーブルグ・レリクスの件は覚えているな？」

その件を聞き、私も思考を海底レリクスからウォザーブルグ・レリクスに変える。あそこではＳＥＥＤ事変を生き抜いた戦友が２人行方不明となってしまったからだ。

「ウォザーブルグ・レリクスで発見された『星屑の竜』と『無限獄の民』……それと似た様な“モノ”が存在する可能性はあると思うか？」

彼の問いに対して私は考える。確かに“無い”とは言い切れない

が、“在る”のならば既にＳＥＥＤ事変で見つかっているはずだ。だがしかし、万が一同じものが“在る”のならば――

「……無いとは言い切れませんが、在るとも限りません。ですが在った場合、即座に行動に移さなければなりません」

私が言う曖昧な言葉に対して彼は溜息をついたが、予想していたのか落胆も大声を張り上げもしなかった。

「そう、だろうな……」

彼自身私と同じ事を思っていたのだろう。探せば在るのかもしれないが、態々彼自身が熱を上げる必要は無いのだ。

それに彼自身、グラールを代表する三大メーカーに今や亜空間研究で有名なインヘルト社には劣るがこの『ＭＡＷ社』の代表であり、今や自分達の所属する一族の長でもある。

私や彼は直接関わっていないが、一番新しいウォザーブルグ動乱は『舞台となった場所に偶然居合わせていただけ』の今までのものと違い、完全に『自分達の諍いが元凶』なのだ。結果２人の戦友がそこに封印されていた“モノ”を使い殺しあってお互い行方不明になってしまった。

その結果として当時の長は責任を取って隠居して一族の長は彼になり、物のついでに一族が経営していたＭＡＷ社の株価は一時期悲惨なものになってしまった。

まあ、私たちにとって会社の経営がまずくなったと言うのが一番重要だった。私たちのスポンサーでもあった組織もスキャンダルやら組織の代表の交代（代表が２人のうち一方の師匠だった）でゴタゴタしていたのだ。

今でさえまずい状況だと言うのにもしココで新たに問題を起こしたらどうなるか？　そうなれば今度こそ一族崩壊、彼は名実共に先

代以上の無能の烙印を押される事だろう。
閑話休題。
「……まあ、今回の調査には私が向かいます。私個人レリクスに興味がありますし、調査ついでに在れば回収します」
その言葉に嘘は無い。今回の件にしたって“アレ”の事が無かったとしても私自身が立候補して向かうつもりだったのだ。
「……すまないな」
「気にしないでください兄上。私は荷物を纏め上げ、現地へ向かいます」
そう言って私は彼の部屋を出てこの場を去った。扉を閉じた時、あの2人の顔が過ぎったが首を大きく横にふるってこの場を後にした。

そんな会話があったのがつい2〜3日前。
私は今、新たに発見された海底レリクスに足を踏み入れていた。集められた傭兵の多くが単独行動を好むのか纏まろうともせずに広間にいる同業者を値踏みしているように見えた。

『これだけの人数と質のいい傭兵が集まっているって事は大手のスポンサーがついているようだな』

自分の隣にいたフルフェイスメットを被った男が周囲を見渡しながら声を上げる。だがその声は機械質で、合成音声に近いものを持つ。恐らく彼は『キャスト』と呼ばれる種族なのだろう。

私自身が話題を欲していたのか、見ず知らずのキャストに向かって声を上げた。

「大手のスポンサーがついているって事は儲けられそうだ、と言うところか？」

『ハハハ。どうやら台詞を取られてしまったようだな』

目の前のキャストはそんな声を上げると周囲を見渡して言った。

『周囲の傭兵の輪に加わろうとしない事からフリーなんだろ？大したものだな』

「昔チームを組んだ事があったがリーダーが死んだ上、残った仲間たちが行方不明になったりして自然消滅だ」

私は声を上げると、目の前のキャストは申し訳なさそうに声を上げた。

『……すまない。軽率だった』

流石に今回は嫌味に聞こえてしまったのだろうか、若干気まずい雰囲気が流れてしまう。だが、そんな気休めの言葉など私には煩わしいだけだ。

「気にしないでくれ、よくあった話だ」

ＳＥＥＤ事変ではガーディアンズだろうが傭兵だろうが。メンバーが死んだりチームが解散したりするなどは吐いて捨てるほど良くあった話だ。
私たちの場合もウォザーブルグ事変は終わった後だったが、リーダーが死んだのはガーディアンズコロニーが落下した時の事だったから嘘ではない。

「それに私たちが悔やんだところで死んだ者が蘇えるわけでも在るまい……」
『君は仲間の死を簡単に受け止めているのか……？』
「そうしなければ、やってられなかっただけだ」

私はそう言うと他のヒトを見渡す。キャストの男も気が滅入ったのか話題を変えてきた。

『まあ、海底レリクスの調査もあって腕利きを集めているのかもな』
「もしくは人海戦術を選んだか、だな」

私はそう言うと手にしていた本を開いて呟いた。

「ま、私は興味があって海底レリクスの調査に来たんだ。スポンサーの考えなんかどうでもいいさ」
『ほう、傭兵を辞めて学者になったのか？　だったらココは宝の山だぞ』
「別に辞めた訳でも学者になった訳でもないが……あと『宝の山』とはどういう意味だ？」

彼の台詞に食指が働いたのか私は彼に向かって声を上げた。

『この海底レリクスはつい最近発見されたものだ。調査はまだ、殆どされていない……この意味は分かるか？』
「システムはまだ動いているからソフト面の解析が出来るし、お宝もまだ残っているから旧文明の技術の粋を集めたモノも手に入る……といったところかな？」
『ああ。あとこれは極秘情報なんだが……』

キャストの男は私に向かって耳打ちする。

『どうやらこの海底レリクスには何か異常なものが存在するらしい。何でも『デュエルモンスターズのモンスターが突然現れた』と言う話が数件出ているらしいんだ』

その言葉を聞き、私の表情が強張ったのが自分でも分かった。自分がココに来た『本命』らしきものの情報が出てしまった以上、ココに留まる必要もない。

「興味深い情報をありがとう。では私はそろそろ奥に向かうよ」
『そうか。気をつけろよ、この辺りはまだ安全なようだが奥は正に『未開の地』って訳だからな』
「気をつけていくさ。お互い運があったら、また会えるかもしれないな」

さて、一応渡された地図を見ながら進むか。

そう思って奥へ進み始めた矢先――

「帰ろう！！　帰ろうって！！」

めんどくさそうにしていた短髪の男ビーストに向かって声を上げたヒューマンらしき金髪の少女――恐らくハーフか養子か何かだろう――の諍いが眼に映った。

『……何だ、あの子供は？　腕利きの傭兵や学者のようにはとても見えないが……』

先程まで一緒だったキャストの男が怪訝そうな声を上げた。だが私にしてみたら興味が無い事だったので気にせず奥へと進む。

「……？」

だが何歩か進もうとした矢先――

「――！！」

突然心臓が強く鼓動し、私の足を止めた。

（バカな……在り得ない……！！）

真っ先に思い浮かんだのは自分達の一族に伝わる、行方不明になった片割れが言うには『呪い』と呼べる代物だった。だがそれは一族の極僅かな“女性”にしか発現しないはずのものだ。

私は男であるから在り得ない。もちろん同一性障害ではない。押さえつけた心臓が熱い、まるで強い熱が心臓を焼き尽くさんばかりだ。

その熱さに耐え切れずに膝を折って蹲った瞬間、突然視界が揺れた。だが今は心臓の熱を鎮めるのが先決だがどうすればいいのか検討がつかない。

「う……ぐ……」

視界の揺れが治まるとようやく心臓を燃やさんとしていた熱は矛を収めた。触れてみても先程の熱さが嘘のように静まっていたのだ。

「何だったんだ……今のは……」

周囲を見渡すと、そこは先程まで人がいたのが嘘だったかのように誰も存在しなかった。先程の心臓の熱さに負けそうになっていたので気付かなかったが相当な揺れだったのだろう。

（……体の調子は異常が無い……私は男だから一族の呪いと言う話ではない……）

私は拳を握っては離したりを繰り返し、身体機能に異常が無い事を確認する。かすかにだが耳に奥の方から誰かが何かを叩く様な音が響き渡る。

（私がやるべき事は海底レリクスの調査……そして本命は海底レリクスに在る“モノ”の捜索……）

眼を瞑って自分のやるべき事を再確認する。その時に耳に誰かが叫ぶ声が聞こえた。

（最大の懸念は先程の一件だ……これが万が一原生生物やスタリティアとの戦闘中に出てしまったら不味いな……単独行動は控えるべきか……）

先程の件を考え、ここは救助を待つしかないかと考えた矢先――

「……ちょっと」

（だが救助が来るかどうかも怪しくなってきた状況だ、どうしたものか……）

「ちょっと！！　無視しないであたしに声かけてよ！！」

甲高い怒り声が私の耳を貫き思考を吹き飛ばす。声のした方を振り向くと、そこには羽のついたヘッドフォンが特徴的な金髪の十代前半近くの少女がいた。

「……それは私に言ってるのか？」

「アンタ以外の誰に声をかけられるって言うのよ！！　か弱い女の子が泣いてるんだよ？　そこは優しく声をかけるものでしょ！？」

だが今の彼女を見ても泣いていた様には見えなかった。むしろこっちに怒りを向けてきたようにも見えたのだが……

「その割には元気そうだな」

「う……」

その言葉に対して彼女は気まずそうに顔をそらした。気のせいか冷や汗も流れているように見える。

「だ、だって『困った時の女の子の武器は涙だよ』ってチェルシーが言ってたから……」

「やはり嘘泣きだったか」

「さっきまではホントに泣いてたんですー……ってこんな話をしてる場合じゃないよね」

顔を若干動かすと彼女の奥のほうに在る扉の色は赤。つまり閉じられた状態だ。更に言えばその扉は私がココに来る際に入ってきた扉でもある。

「ああ、どうやら私たちは閉じ込められたようだな」

「うん。同じ境遇の人がいてもどうにかなるって訳じゃないし……ところで、何が起きたか分かる？」

彼女の問いに対して私は首を横に振るう。自分自身心臓が熱くなってそれどころではなかったし、視界が揺れた事と何か関係が在るのか？

「そうよね。あたしもいきなりで、それどころじゃなかったし……気がついたら皆いなくなってるし……どうしたらいいんだろ？」

彼女の問いに対して私は淡々と答えた。

「このまま救助が来るまでおとなしくするか、奥に進んで脱出するかの二者択一だな」

「やっぱそれしかないよね……大人しくするのって苦手なんだけどな……」

彼女が納得したかのような表情を見せるが私は奥に進む。その姿を見たのか慌てたかのような声を上げた。

「……って、まさか奥に進む気!?」

「そうだ……まあ、慎重に進むしかない。待っていても救助が来ないかもしれないしな」

先程起こった心臓の熱の件もあって奥に進むにしても慎重に事を進めなければならない。本当ならば彼女の力を借りたいところだが、その様子では借りられそうに無い。

「無理無理!!　やだやだ!!　危ないって!!　ココは未開のレリクスなんだよ?　すっごい危ないんだよ!?」

「……嫌なら来なくてもいいぞ。ココは安全のようだからな」

私がそう言うと奥へと進む。しばらくすると彼女が声を張り上げながらこっちへ向かって走ってくる音が響いた。

「行くから!!　あたしも一緒に行く!!」

その言葉を聞いて私は小さく笑みを浮かべた。これで心臓が熱を持ってしまった時の保険は出来た。

「そうか……すまないが名前は何と言うんだ？」

一応同行する事になるので、名前だけは聞いておこうかと思って問いただした。

「ふぇ？　あたし？　あたしはエミリア。エミリア＝パーシヴァル」

エミリアはきょとんとした表情で自分の名前を答えたが、即座に表情を変えて問いただした。

「それでアンタはなんて名前なの？　あたしに名乗らせてアンタは名乗らないんじゃ話にならないわよ」

彼女の問いは尤もだ。私は心臓の熱を気にしながら声を上げた。

「そうだな……私の名前はギュスターヴ。ギュスターヴ＝ウィンストンだ」

私が自分の名前を名乗ると、エミリアが再び声を上げる。

「それじゃギュスターヴ……その……これからしばらく一緒だから……よ、よろしくね」

彼女がそう声を上げると私も声を上げた。

「了解した」

そう言ってしばらく先へ進んだ矢先、先程の広場より小さい部屋に行き着く。するとそこには二足歩行の鮫の様な原生生物が腕を振

り上げながら歩いていた。
「あぁー、やっぱり原生生物がわんさかいる……見逃したりは――」
「してくれるんだったら傭兵など必要ない」
「だよねぇ……」
エミリアの言葉を私は一刀両断する一方で、ナノトランサーを起動してツインハンドガンと自作のシャドゥーグを取り出す。それは悪魔をデフォルメ化させ、右手に音叉を持たせたマスコットの様なものだった。
「あれ？　ドゥーグとハンドガンを使い分けるの？　近距離主体の人かなって思ったんだけど……」
「……そうだ。私の都合ですまないが今回は遠距離主体で行く」
あの発作が元凶で今回は遠距離主体の攻撃方法を取る事にした。だが私の様子を見てエミリアの様子がおかしくなる。確かにツインハンドガンとシャドゥーグを同時に使うのは珍しいとは思うが、別に法律で禁じられているわけではない。
「あの……その……」
「何だ？」
「あのね……えっと、えっとね……直前で言うのもなんだけど……」
しどろもどろに言い出すエミリアだったが、意を決したのか声を上げた。
「あたし、武器は持っててもも実は戦闘経験なんて殆ど無いの」

その言葉に対して私は一瞬だけ眼を見張った。自信なさ気だった彼女は先程の言葉の影響か、活力に満ち溢れていた。

「……だから、頑張って！！　あたしは応援してあげるから！！」

その言葉に対して私は大きく溜息を吐いた。

その時私は気付いていなかった。その溜息がＳＥＥＤ事変の時、仲間たちの喧騒や見当はずれな発言に呆れていた時の物と同じだった事を。

傭兵と少女の邂逅（後書き）

さて皆さん、最低なチート系転生者が嫌いなことが判明してしまった久々のデボエンペラーです。
リア友や皆様からの意見を元に執筆しなおしました。まぶ錬などは気が向いたらリメイクしようと考えていますゆえご容赦を。

ところで皆さん、質問があります。
再修業していた際、私は瞬様のなのは小説を見て転生者のオリ主について深く考えさせられました。

そしてＰｓｐｏ２は実質オリ主様の物語でもあります。更に『オリ主』の大半は『転生者』を指す事が多いです。

その中には「腐った運命を変えてやる！！」「ハーレム作るぜフハハハハー！！」「なんでチートオリ主の僕様の方が優れてるのに、何のとりえも無い原作主人公が勝ち組なんだ！！　許せないお！！」「●●はなんて傲慢な悪なんだ！！」とほざく最低系転生者なんざ吐いて捨てるほどあります。

本題に入りますが、そう言った「最低系オリ主」を敵に出していいのかと言う考えになってしまい、出した場合もうラスボス変更の可能性（特にエピソード１）まで出てきてしまいまして……それにＰｓｐｏ２の原作なぞるだけって言うのもなんだし……

と言うわけで転生者をどうするかと言うアンケートをとります。

１．転生者お断り（大まかなストーリーやラスボスは原作どおりに行きます）

2．転生者上等！（ストーリーやラスボスが変更される可能性あり）

どちらかに入れてください。

……まぁ、遊戯王入れた時点で原作崩壊上等ですけど……あれマジで劇薬だわ

異能者（前書き）

ここでようやく遊戯王と本格的にクロスします。
何かいろいろととんでもない事になってますが、遊戯王じゃ特に珍しくないよね！！

異能者

エミリアのカミングアウトから数十分後……

「行け！！　リゾネーター！！」

悪魔を模したシャドゥーグが地面を射抜いて原生生物を転ばせ、私がその隙をついて左手の銃でその頭部を射抜く。続けて右手の銃で突進してきた浮遊型のスタリティアを撃ち落した。

「エミリア、1体そっちに行ったぞ！！」

私の声を合図にエミリアが手にした長柄の棒から炎を灯す。流石に応援するだけだと言うのは私も反感を覚えたので何が出来るかと問いただしたところ、炎と雷に回復系のテクニックが使えるし接近戦や射撃戦も基礎だけは出来るとの返事が返ってきたので、私が撃ち漏らしたのは彼女が担当すると言う事で決着がついた。

「ほいっと！！」

彼女が放った炎……炎系テクニックの初歩・フォイエがスタリティアを焦がしつくし、地面に落下したと同時に砕け散る。

「さて、次は……」

扉を開き細い通路が伸びているのを見ると、ナノトランサーを調整してバイザーを取り出すとそれを装備してから眼前を見た。

「やはりか……」

直後に右手のハンドガンで通路に向けて何度か発砲する。エミリアが驚いた表情を見せるが次の瞬間には私の行動を理解した。

「え……爆発した？　なんで罠があるって分かったの？」

「このバイザーはガーディアンズなどで支給されているゴーグルの改造品で、コイツを使って爆弾を見つけたと言う訳だ。ちなみにサーチした爆弾の数も数えてくれるぞ」

そう言いながらも撃ち続ける私だったが、ゴーグルのカウントが０になったのを合図に撃つのを止めた。

「ゴーグルって……重い、嵩張る、邪魔の三拍子が揃った不良在庫じゃなかったっけ？」

「昔の話だ。私のバイザーはＭＡＷ社の商品だし、今ではＧＲＭ社から性能がいいゴーグルがガーディアンズや同盟軍に支給されているって話だからな」

今もガーディアンズにいる仲間の一人が手紙で愚痴っていたのを思い出して言う。私の言葉に対してエミリアが感嘆の声を上げる。

「行くぞ……とは言えまだまだ続くか……いつになったら外に出られる事やら……」

徐々に奥に進んでいく私たち。再び広い空間に出て、周囲に危険が無い事を判断した時エミリアのほうからなにやら音が響いた。

「何があった？」

私がそう言って振り向いた時、彼女は腹部に手を当てて、ただ一

言言っただけだった。

「お腹空いた……」

彼女の赤くした表情と腹部を押さえた様子を見て私は溜息をつく。仕方ない、リゾネーターを警戒モードにセットしなおして私も腰を下ろした。

「さて、と……」

私は黄色い箱を取り出すとその中からカロリーメイトを取り出し、一本エミリアに渡した。

「食うか？　あとサバイバル用の缶詰もあるが……」

「……いただきます……」

彼女がそう言ってすごい勢いでカロリーメイトと缶詰にあった物を食べると声を上げた。

「技術や知識、事前の用意まで隙が無い……さすが傭兵って感じ……」

彼女がそう言うとようやく安心の声を上げた。満腹になったのか表情も明るい。

「……なんか、ちょっとホッとしたよ。あんたがいれば、安心ぽいっしさ」

「そうか」

私は黙々と缶詰や箱を仕舞う。レリクスの調査団が後でこれを発見した時、何を言われるか分かったものではないからだ。

「あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気とかこれっぽっちも無かったのに……だって言うのに、あのおっさん。あたしが働かないからって、無理やり連れ出してこんな危険なレリクスにほっぽって……」

徐々にエミリアの話は「おっさん」なる人物に対する愚痴にシフトされていった。と言うより先程とんでもない発言が出た気がするのだが……

「あー、なんかだんだんハラが立ってきた！！　こんなか弱い女の子を、一人にするなんてひどいと思わない！？」

「エミリア、お前は少し働いた方がいい」

先程のとんでもない発言に対して私が水を飲みながら意見を言うと、エミリアは更にふて腐れたような声を上げる。

「ぶー！！　なによギュスターヴ！！　アンタもおっさんの味方！？」

「少なくとも働かない奴に拒否権は無いだけだ。何も過労死するまで働けというわけでもない」

「いいよいいよ。けっきょく皆そうなんだから。あたしの言う事なんて誰も本気で聞いてなんかくれないんだ……まあ、とにかくあんたがいれば無事に帰れるような気もするし、おっさんには後で文句言いまくってやる！！」

エミリアの言葉に私は相槌をうつだけで済ませる。よくよく考えれば仲間の一人の愚痴も良くこうやって聞き手に回っていたなと思い出した。

「『ＳＥＥＤはもう存在しないからレリクスは安全だ』とか言い張ってあたしの言う事信じてくれないしさ……」
「それが一般的な解釈だからな。そもそも原因が完全消滅したのではレリクスも起動しなくもなる」
私は一般的な解釈を述べてエミリアに反論する。だが私の言葉が切欠になったのか彼女の表情は真剣なものになる。
「そりゃ、今まで発見されたレリクスはＳＥＥＤ襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ。でも、全部が全部そうだったかって言うとそう言うわけじゃなかったんだよね」
突然真剣な表情になった彼女の言葉に私は息を呑んだ。今までの自堕落な彼女とは打って変わったかのような雰囲気に私は圧されていた。
「一説によるとＳＥＥＤの散布する素粒子に反応して起動しているみたい。だけど同時に磁場の乱れも観測できるから、どうもそれだけじゃないんだよね」
「だが、何故お前はレリクスは危険だと言えるんだ？　磁場の乱れとか素粒子云々は関係ないのでは？」
「うん、でもＳＥＥＤは3年前に一掃されているはずなのに、こうしてレリクスは起動しているわけでしょ？　それにＳＥＥＤが居たにも拘らず起動しなかったレリクスも存在しているのよね」
その言葉に私は息を呑んだ。レリクスやスタリティアの存在意義はＳＥＥＤの消滅と共に全て意味が無いものになっているはずだ。それに私は起動しなかったレリクスについて1つ思い当る節が在る。そう、ウォザーブルグ・レリクスだ。
それにこの海底レリクスではＳＥＥＤが存在しないにも拘らずス

タリティアは今もなお起動している。それに対してウォザーブルグ・レリクスはＳＥＥＤ事変の際には微塵も反応しなかったが、今回のウォザーブルグ動乱に関しては起動していた。

「レリクスがプログラム管理である以上、トリガーになるものもそれに準じたものになるのよ。それにウォザーブルグ・レリクスはＳＥＥＤ以外のものが原因となって起動しているわけだし……」

しかしそこでエミリアの説明が止まって表情も元のエミリアに戻る。その表情はまるで赤点のテストを隠そうとする子供のように見えた。

「……あ、え……えぇ～っと……」

「……やけに詳しいな……」

彼女の話は非常に興味深かった。私もレリクスに関しては思い当る節があったが、推論だけの机上の空論どまりだったのだ。しかし彼女の話は何らかの条件を組み込んだ非常に興味深い話になっている。

「あ、いや……こ、このぐらい常識でしょ？」

「私もレリクスには興味を持っていたからその話を仲間たちにした事はあったが分かっていなかったぞ」

昔こういった話を生き残った仲間たち（ウォザーブルグ動乱の主役とガーディアンズに居るキャスト、後は逃亡・行方不明・死亡が１人ずつ）にしてみたが、あの２人は曖昧な表情を浮かべて残った１体は完全にわかっていなかった。

「だったらその仲間たちに問題があったんじゃないの！？　常識

！！　常識だって！！　傭兵なら誰だって知ってて当然なの！！」

あまりに真剣な表情で彼女は私に向かって声を荒げた。

「いい、今の説明は流して！！　アンタは結構知ってるみたいだけど、どうせあたしが言ったところで誰も信じてくれないんだし！！」

「少なくとも私は興味を持ったぞ。後で詳しく話してくれ」

純粋に彼女の解釈に私は興味を持った。何故今もレリクスが起動しているのか、ウォザーブルグ・レリクスは何故ＳＥＥＤ事変の時に起動せずに問題が起きた時ばかりに起動していたのか、その謎が解けるかもしれないのだ。

「詳しくって……当ても無い推論なんだけど……もしかして、信じてくれるの？」

「私のほうも当ても無い推論だったからな。推論も２つ同じ結論が出たら確信に変わるかも知れないからな」

「確かにそうだけど……」

次の瞬間には彼女は立ち上がって手にロッドを持って先へ進み始めた。

「何処へ行く、エミリア！！」

「出口探すんでしょ！！　休憩もいいから先に進もう！！」

彼女が先へと進み、私も立ち上がる。先程までと立場が逆転してるなと苦笑しつつ、彼女の後を追った。

奥に進むと先程の鮫の様な原生生物が従来の緑色の奴と紫色の奴の2種類が姿を現し、その奥には四足歩行型のスタリティアが鎮座していたりしたので、私たちはそれを排除しながら奥へ進む。

「うえぇぇ……夢に見そう……なんなのよ、あの気持ち悪いスタリティアは……」

「そうか？　私としてはヒトがＳＥＥＤフォームになる姿を見せられる方がひどいと思うが……」

アレはトラウマものだった。ヒトの体が変質していったり爆ぜたりしてＳＥＥＤフォームに変貌していく光景を間近で見た事も在るのだ。

「……流石にそれと比べちゃまずいと思うけどな……」

彼女の言葉も尤もだと思いつつも私たちは足を進める。センサーを飛び越えたり分岐路を右に行ったり無数の原生生物を撃ち貫いたりしているうちに、一際大きな扉の前に出た。

「ずいぶん奥まったところまで来たけど、まだ出口見つかんないの？」

「それは私が知りたいぐらいだ……」

いつ発作が起こるか分からないせいか、今すぐ外に出たい気持ちが強い。扉には翼や心臓を握った手に足および尾を持った赤い蛇……いや、頭部が龍に似た形をしていたから龍なのだろう、その形をした刻印が刻まれていた。

「ふむ……」

周りに彫られた文字や絵も興味深い。何かを拝むヒトの絵を見るからにココは何かを祭る施設だったのだろうか、後で兄に依頼して調査団を結成して調べてもらうとしよう。

「あ、扉も開くみたい。入ってみよ」

エミリアがそう言うと同時に刻印が鈍く輝き、扉が開く。先に入って周囲を見渡したエミリアは何かに怯える様な声で私に向かって言った。

「うわ〜……ここにあるのって全部、大型の自律機動兵器だよ」

彼女の言うとおり周りは何かを護るかのように彼女の言う大型の兵器……キャストが居なかった頃の名残だろう二手二足の直立歩行型のスタリティアで囲まれている。そして、その周りに囲まれて在るものを見据えた時、私は心臓が高鳴るのを感じた。

「ん？　あそこにあるのを見てるの……？」

エミリアが私の視線に気付いたのか目線をそちらに向ける。それを見た彼女は怪訝そうな表情をした。

「う〜ん……他のと比べて黒くて紅い装飾が施されてるみたい。

それがどうかしたの？」
「あ、ああ……あれが気になってな……」
高鳴る鼓動を抑えながらエミリアが言う『紅い装飾が施された黒のスタリティア』を見据える。恐らく自分が求めているものは、あれをどうにかしない限り手に入らないだろう。
「ふーん……ま、この部屋で行き止まりみたいだし別の道に行きましょ。確かさっきの通路を右に曲がったから左の方に行ってみよ？」
私はエミリアの言葉に我に返る。もう既にマッピングは済ませてあるから、後は兄の下へ戻るだけだ。
（あわよくばここで回収と行きたかったが……）
どうせまた来る事になるのだから慌てる必要も無いだろう。何せこの所在を知っているのは私と彼女のみだ。
問題は彼女の言う『おっさん』と言う人物に言って彼女らの組織と争奪戦になる可能性があるかもしれないと言う事だが、そうなったら仕方が無い。正直にウォザーブルグ動乱の件を話すか金で解決するかのどちらかだ。
“それ”の見た目は無害そうなので『“それ”は危険だ』などと言う言い訳は通用せず、強硬手段に出るのはこれ以上問題を起こしたくないので論外。それにこちら側の話を信用してくれなかったらおしまいだが、金で解決できるならそれに越した事はない。
彼女と行動しているのは緊急事態であるためなので、彼女の属している組織との接点も無いので今後の事についての相談も出来ない。今回は諦めるしかない。

「そう、だな……」
「ギュスターヴ……今のアンタ、ウルスラさんに禁酒令出されて目の前にお酒があるのに飲む事が出来ないおっさんの雰囲気に似てたけど？」

その例えはどうかと思うが、ある意味的を得ているので反論できない。

「アンタが何を欲しがってるのか知らないけどさ……ただでさえこっちを見てて怖いのに、もし動き出したらって思うと……ねぇ、早く戻ろうよ」

彼女の言葉に頷きつつ、引き返そうとする。欲に目が眩んでスタリティアを起動させてしまったのでは話にならない。そう考えた矢先のことだった。

「――！！」
一瞬だけ、最初の広間の時以上の発作が自分の身を襲い――

『……我ガ眠リヲ……妨ゲタノハ主ラカ……』
その刹那、黒と紅のスタリティアが起動した。

「ちょ！？　スタリティアが喋った！？　今までこんな事って無かったのに……！！　大体、言った側から動き出さないでよ！！」

エミリアが驚愕の表情を浮かべたが、私は2つの事を考えていた。スタリティアが喋った原因は“あれ”が原因だと言う事と、“あれ”を入手するためには目の前のスタリティアを倒さなければならないということだ。

（恐らく戦うしかないか……だがこれで“あれ”を堂々と手に入れることが出来る！！）

動いた事による驚愕よりも、“あれ”を手に入れることが出来るという歓喜に支配されながらも私はエミリアに向かって叫んだ。

「エミリア！！　脱出できるか！？」
「……だめ！！　ロックが掛かってて出られない！！」

彼女がそう叫ぶと私もＧＲＭ製のＡグレードの中でも最高峰のツインハンドガンを取り出し、今にも襲い掛かりそうなスタリティアを目前にして彼女に向かって言う。

「戦うしかないな。エミリア、私の援護を頼む……無理に戦わなくてもいい」

歓喜に包まれながらも、私はエミリアを庇う事を忘れない。もし“あれ”にかまけて彼女を死なせてしまったら、報告書の解釈次第で彼女の属している組織と全面抗争だ。兄も躊躇い無く私を切り捨てるだろう。

「や、やっぱそうだよね……」
「部屋から出られない、隠れる場所も無い、周りのスタリティアも動かないとは限らない……生きて出るには、目の前の敵を何とかしなければならないぞ」

私の目的のためにもな、と心で呟いてからシャドゥーグを取り出す。後はＧＲＭ製のシールドが１つにとＭＡＷ製のセイバー２本が私が持ってきた全装備だ。

『汝ラ……炎魔ノ竜ヲ担ウニ相応シイカ……確カメサセテモラオウ』
「……向こうもやる気満々だし……うー、うううーっ！！」

スタリティアの台詞に対してエミリアも覚悟を決めたのかロッドを取り出し振るい、私の目線の先……スタリティアに向けた。

「……わかったよ、あたしも覚悟決める！！　あんたの実力……信じてるからね！！」

「……任された。それでは……」

その言葉を合図に私は銃口を頭部に向けて放ち、声を上げて叫んだ。

「戦闘、開始！！」

それを合図にエミリアも私から遠ざかりフォイエや雷系テクニック・ゾンテを放つ。彼女のマドゥーグもそれに続いた。

『ホウ……二手ニ分カレタカ……』

私が銃を相手の間接や頭部に向けて放ち続ける。あの手のタイプは頭部か間接を破壊する事で無力化するタイプだ。まずはそこを狙う。

『小癪ナ！！』

だが相手も狙いが分かっているのか手にした武器を振るって銃弾を防ぐ。しかしこれで――

「ほいっと！！」

エミリアの叫びに呼応してロッドから炎、彼女の側に浮いていたマドゥーグから雷がスタリティアの背後に直撃する。

『ナッ！！』

「はぁっ！！」

動きが止まった隙に再び銃撃、シャドゥーグの援護も忘れない。敵に遠距離攻撃は無いが武器を振り上げ、こっちに向かって跳んできた。

「くっ！？」

咄嗟に跳んで避けたが、シャドゥーグが攻撃に巻き込まれて粉々になってしまう。何とか立ち上がって斧状の武器を射抜く。斧は柄が二つに分かれ、刃がついてない方の柄が地面に転がった。

「やった！！　これであの斧の攻撃は無くなった！！　と言うわけで景気付けにもう一発！！」

エミリアが喜ぶと再びフォイエを放って頭部に直撃させる。すると頭部が直撃した影響でぐらつき、地面に転がった。

「……倒せたの？」

流石のエミリアも怪訝そうだが、私は息を呑んだ。スタリティアが徐々に罅割れていき、中から炎の渦が吹き溢れて来たのだ！！

『……フン、所詮1万年近クノ骨董品カ……ホンノ少シノ攻撃デ首ガ落チルトハナ……』

罅割れた身体からまず悪魔の様な翼が生え、腕の装甲が砕け散ると一部が紅く染まった黒竜の腕が現れる。脚も同様で腰部からは黒き尾が姿を現し、頭部があった場所からは悪魔の角を持った竜の首が生える。

己が解放された歓喜の咆哮を上げ、スタリティアの装甲を完全に吹き飛ばす。脚を一歩前へと進めて転がった頭部を踏み砕き、炎を伴い姿を現したその姿は正に――

「炎魔竜……レッド・デーモンズ・ドラゴン……」

禍々しさとある種の神々しさを兼ね備えた炎魔竜が姿を現す。私はかつて星屑の竜を報告書で見た事はあったが、それとは別の……否、私にとって星屑の竜以上の美しさを持ち合わせていた。

嗚呼認めよう。私はその存在に心を奪われ魅了された。豊富な資産を全て投げ打ってまで手に入れたいと思ったのは生まれて初めてだった。

「あんたの顔……滅茶苦茶すごいんですけど!?」

エミリアも私の顔を見て引いていた。それを聞き、私は現実に戻って気を引き締めた。とは言え、やはり興奮は隠せない。

「炎魔竜の力……貰い受けるぞ！！」

私はそう叫ぶと同時に銃を炎魔竜に向けて放つが、竜が腕を振るうとフォトンの弾丸を消し飛ばしてしまう。生半可な攻撃では攻撃は通らないという事か。

『次ハ我ノ攻撃ダ！！』

腕に炎を灯す炎魔竜だったが、すかさず鋭い爪と共に腕を私に向けて振り下ろす。

『アブソリュート・パワーフォース！！』

その叫びと共に私はツインハンドガンを爪が触れる直前に交差させて防ぐ。しかしシールドではないとは言え攻撃の余波が私を襲い吹き飛ばす。

「！！」

壁に叩きつけられ、握っていたものを見ると驚愕した。ツインハンドガンの砲身が曲がっていたり装甲が罅割れていたりしていたのだ。フォトンを溜め込むフォトンリアクターも損傷しジャンクパーツにも使えなくなったそれを放り捨てた代わりにセイバーを2本取り出す。セイバーは青い2枚刃の刀身を持つＭＡＷ製の試作武器『イグザム』の二刀流……言うなれば『イグニス』だ。

「炎は効きそうにないし、今度は氷！！」

背後でエミリアが氷系テクニックの初歩・バータを発動させて竜を襲うが、その竜の炎に阻まれて瞬く間に蒸発してしまう。

「やはり生半可な攻撃では通用しないか……その上守備も通用しない……」

「笑いながら言うなー！！」

エミリアの叫びに耳を貸さずに私は己の考えに没頭する。彼女の様に氷属性で戦うというのも悪くないが、それも強くないと炎によって溶けてしまうというおまけつきだ。

「だが……」

それでも口元に笑みが浮かぶ。最初からこの程度で倒れるはずが無いと確信していたからだ、それを乗り越えずにして炎魔竜の力を得ようなど甘いを通り越して愚かとしか言いようが無いからだ。

相手は1体であり街に押し寄せてきたＳＥＥＤの大群の様な数の暴力はない。相手はディ・ラガンと同様の竜型原生生物のような形をしており落下してくるＧコロニーの様な人間ではどうしようもない理不尽な存在でもない。

まだ勝機は十分にある。

「それが分かっただけで、十分だ」

イグニスを振るって炎魔竜に襲い掛かる。まずは左のセイバーで縦に竜の右腕を斬りつけ、続けて右で同じようにして斬る。

止めはセイバーを交差させて突進、右腕を斬りつける。小型の敵には滅多に当たらないが、これだけ巨大な敵ならば当てる場所は好きなだけある。

『ホウ……少シハヤルヨウダナ』

だがこれでも不十分。炎魔竜の身体は硬く、十文字の傷をつけるだけに留まった。これでも今の自分の武器の中でも最強の武器なのだが炎魔竜に通用しない事が分かってしまった。

シャドゥーグやツインハンドガンは壊され、シールドはツインハンドガンの例を見て役をなさない。手持ちの武器では倒す事は出来ないだろう。

ならば考えられる手は1つ。自分の持つ異能を解放させるのみだ。

「使うしかない、か……」

私はそう決意すると懐から“ある物”をハンドガンやセイバーの時以上に慣れた手つきで取り出す。“それ”を見た炎魔竜はニタリと笑い攻撃を一時中断した。

「え？　なに？　なんで攻撃を止めてるの……？」

エミリアは呆然としながらもテクニックを放ち続けたが、2～3発放った後に攻撃をやめて私の方へ向かった。

「何をしようって言うの……？」

「エミリア。私はこれから自分の異能を使わせてもらう」

エミリアが首をかしげる中、私は“あるもの”……カードの束から2枚取り出すと、まずは1枚目を振るう。

「いでよ、ビッグ・ピース・ゴーレム！！」

私の声を合図にカードが輝くと、地面から巨大な手足を持った岩石兵が姿を現した。そう、これこそが我が一族に伝わる“異能”。カードに纏われた意思や歴史を読み取り、それを具現化させる能力だ。それを用いる力を持った集団こそが我が一族である。

「え？　えぇ！？　でゅ、デュエルモンスターズのカードが実体化したぁ！？」

エミリアも呆然とするが、私は続けてもう1枚のカードを振るう。

「続けてフレア・リゾネーターを召喚する！！」

そう言って姿を現したのは先程破壊されたシャドゥーグのモチーフとなった悪魔の背に炎を宿したモンスターだ。そして私は一族が持つ異能の中でも最強の術を発動させる。

「レベル5のビッグ・ピース・ゴーレムにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング！！」

その声を合図にフレア・リゾネーターが3つの輪に、ビッグ・ピース・ゴーレムが5つの星となる。輪が私を飲み込み星が身体に入り込み、星と自分の意識を同調（シンクロ）させた。

「王者の決断、今赤く滾る炎を宿す真紅の刃となる！　熱き波濤を超え、現れよ！」

同調を高めるため、私は祝詞のように声を紡ぐ。その刹那、炎が身体を飲み込み自分を新たな姿に作り変える。

「我が身に纏え炎の鬼神、クリムゾン・ブレーダー！！」

一瞬だけ炎が紅い鎧を纏い双振りの刃を持った騎士の姿が映し出され、私は鎧に纏われ剣は私の腕に握られる。

「な、なに！？　何が起こったって言うのよ！？　デュエルモンスターズの実体化に、それを用いた融合！？　何が何だかわからないわよ！？」

エミリアが驚愕の声を上げるが、私達の耳にはそれは届かない。互いの姿しか見えない、互いの声しか届かない。

紅騎士（クリムゾン・ブレイド）と炎魔竜（デーモンズ・ドラゴン）。今この場に２つの赤の名を持つ存在が姿を現した。

『ホウ……同調カ……ソレガ貴様ノ力ト言ウワケカ……懐カシイナ……ダガ容赦シナイゾ！！』

炎魔竜（彼）は笑うと口に炎を溜め込む。それは正に地獄（ヘル）の業火（フレア）を思わせる炎の弾丸だった。

「ああ、これで決着をつけようか。お前を倒し、その力を貰い受ける！！」

紅騎士（私）もつられて笑うと剣に炎を宿す。炎を宿した剣、何度か炎属性のツインセイバーを振るった事はあったが、これに勝るものは無かった。

「……」

エミリアは呆然としながらも既に私の後ろに居る。後は敵の攻撃を防ぎ、相手を切り伏せるのみだ。

『行クゾ……クリムゾン・ヘル・フレア！！』

炎魔竜の口から炎が濁流のように吹き荒れ、私と背後に居たエミリアを襲う。私は背後に居るエミリアが巻き添えを食らわないように剣を炎にかざし、それを受け止める。

「ぐぐぐ……」

だが徐々に炎が私の腕を侵食していく。鮮やかだった鎧が赤黒く染まっていく中で、私は剣に込める力を強くする。

「ここで終わるわけには行かない！！」

そう、私はかつて一族が誇ったチームの最後のメンバーとしてのプライドがある。プライドを無くした傭兵や政治家は、己の生業を淡々とこなす始末屋と政治屋に成り下がる。故に私は一回もプライドを捨てた事は無い。

だからこそ、ここで終わるわけにはいかない。私の名に……私の矜持に賭けて、全てを断ち切るわけには行かない！！　ここで終わったら、私は彼らの名を汚す事になるからだ！！

故に炎の奔流ごときで屈するわけには行かない……そう思った刹那、心臓が強く脈打つ。だがその鼓動は今までのものと違って自分に力を貸すような鼓動だった。

「はぁぁぁっ！！」

その鼓動に乗って腕を振るう。剣に纏わりついた炎は縦に両断さ

れ、両側の壁に叩きつけられた。

『！！』

「これで止めだ！！」

私は手にした双剣で炎魔竜を縦に切り裂き、続けざまに剣を交差させて突進する。先程のアーツと同じ構え……だが今回は剣に宿した炎で相手を切り裂く！！

「燃え滾れ、レッドマーダー！！」

私の叫びを合図に交差させた剣を振るい、十文字の傷を胴体に斬りつける。それと同時に私の身体に宿っていた紅騎士の鎧と剣も消滅した。

『……見事ダ……』

炎魔竜はただそれだけを言うと十文字の傷跡からあるものが姿を現す。その直後、炎が炎魔竜を飲み込み、それが消えたときには炎魔竜も姿を消していた。

「……え？」

エミリアは呆然とする。恐らく彼女は信じられないものを見る様な眼で目の前のものを見ているのだろう。

無理も無い、彼女を怯えさせた存在の正体らしき物は……1枚のカードなのだから。

『汝、我ガ力ヲ振ルウニ値スル。我ガ力、存分ニ振ルエ』

消えたはずの炎魔竜の声が響き、私は姿を現したカードに近づくと王から剣を受け取る騎士のようにそれを手に取った。

「分かった。炎魔竜……レッド・デーモンズ・ドラゴンの力、しかと受け取った」

異能者（後書き）

さて、ようやくレモンを手に入れたギュスターヴですが本来のプロットではここでギュス死亡→ミカ登場となったわけですが、まだ転生者についてまだ悩んでいます。

そもそも現時点でアンケートに協力してくれたのが1人と言う有様なのです……と言うわけで延長します。

後なんでレリクスにカードが在るんだよ、と思った方に言います。

遺跡にカードなんて遊戯王じゃ珍しくないんです。

謎の襲撃者（前書き）

投票者一名でしたが、彼の意見の元小説を書いていたのでもう出来てしまいました。

よってこれからはこの方針で行く事にします。

謎の襲撃者

先程の部屋を出て、分岐路の所に戻った私達。そこを左に曲がったところで私達が見たものは……

「……」

「……階段？」

どう見ても下に下りる階段だった。それを見たエミリアが盛大に溜息を吐いた。

「……これ以上奥へ行ったら遭難するわよ。出口も見当たらないみたいだし、そろそろ戻らない？」

エミリアの言葉に私は頷く。望みの品は既に手に入っている以上、ここに居る理由はもう存在しないし、後は調査団の護衛などで再び来る事になるだろう。

「そうだな」

「それじゃ戻りましょ。一応マッピングはしてたんでしょ？」

私は携帯型マップを参考にして戻る事にする。幸い罠とかは既に解除ないし排除していたので行きと比べてスムーズに進行した。

「フーン、アンタの一族ってそう言う一族なのね……」

その道中、私たちは話しながら進んでいた。エミリアに見せた以上隠す必要は無いため、私は素直に自分の力について話した。

「デュエルモンスターズに描かれたモンスターや魔法を実体化させる事の出来る一族か……遊戯皇とかでよくある能力だけど、まさか実在してたなんてね……」
「ああ、確かサイコ決闘者だったな？」
遊戯皇とはグラールで大人気のデュエルモンスターズ販促アニメであり、様々なシリーズで放映されている。サイコ決闘者と言うのはその中でもカードを実体化させて自分の手足のように操る事の出来る我々異能者に似た設定の事だ。
「そうそれ。後はカードの精霊云々ね。まぁ、眉唾だと思ってたけどそれもあるかもしれないわね……」
「ああ、存在するが？　少なくとも私の一族では何人か見る事が出来たからな」
私の言葉に驚くエミリア。続けて私はあることを話す。
「一応話しておくが、私の本来の目的はレリクスに存在しているカードの入手もしくは確認だ。あるかないかまでは分からないからな」
「あー、そうでしたか……今更驚く事じゃ無いですけどねー」
ウォザーブルグ動乱の件については追々話すとして、これだけは言っておきたかった。
「あと我々は異能者であることはなるべく隠していきたい。デュエルモンスターズがこのグラールを生きる人々の支えになっている以上、表に出て脅かすわけには行かないんだ。すまないが……」
「あんた達の事は内緒にして欲しいって事でしょ？　分かってるわよ」

エミリアの顔には『義理』と言うより『付き合いきれない』と言う感情の方が強かったが、むしろ後者の反応の方がうれしい位だ。義理感情で巻き込んでしまったらどうしようもない。

「ま、アンタが普通の武器使ってる時点で、内緒にしたかったってのもあるんでしょ？」

「すまないな……」

私が礼を言うとエミリアも笑いながら言う。

「ま、あんたが居なきゃあたしも無事じゃなかったんだしいいわよ。これで貸し借りはなしって事で」

にこやかに笑うエミリアに私も口元で笑みを浮かべる。そして腹ごしらえをしていた広間に差し掛かったとき、私は眉間に皺を寄せた。

「……！？」

眼前に殺気が吹き荒れているのだ。しかも明らかに私だけに向けられているのにエミリアの身体も硬直する程の物だ。

『……コノ感覚……マサカ奴ラカ！？　気ヲツケロ！！』

「奴らだと？　一体どういうことだ……？」

炎魔竜の声が響き、私は奥の方に目を向けると同時に1人の男が姿を現す。耳の長さから言ってヒューマンだろう。ＳＥＥＤフォームでもない以上、警戒する様子は無いと思うのだが……

「ようやく見つけたぜ……ロリショタキャストがいたし地震も起きたからテメエらを探していたんだが迷ってしまってなぁ……あのクソキャスト、態々残ろうとしてたオレの邪魔しやがってよぉ……しっかし『原作』と道も違ってるしどうなってんだよ……？」

美の女神にわがまま言ったのではないかと思わせるほどの整った顔立ちに紫色の髪、黒い鎧の様なものを纏った上には赤いコートの様なものを羽織った青年がそこに居た。だがその眼は今も私を見据え、射殺す様な雰囲気を持っている。

「お前は何者だ？　何故私をそのような眼で睨む？　私とお前は初対面のはずだが？」

「ああ初対面だぜ。でもよ、よりにもよってテメェファンタシースターポータブル2系の主人公の座にちゃっかり収まってるんじゃねぇか。ポータブル1とかユニバースとかだったら百歩譲って許してやったけど、よりにもよってポータブル2だろ？　温厚なオレでもカチンと来ましたよぉ、テメエがそこに居たんじゃオレの目的が果たせないじゃねぇか」

『ファンタシースターポータブル2系』？　『ポータブル1』？　『ユニバース』？　私が居たら彼の目的が果たせなくなる？　先程言っていた『原作』と言う言葉といい、さっぱり訳が分からないな。

「で、あたし達になんかよう？　出口教えてくれるの？」

「教えたいのは山々だがなぁ、俺が知ってる海底レリクスと道が違ってるんだからこっちが知りてぇよ、ツーかここで鉢合わせだし。ミカからテティの花の匂いがしたからそれを追ってきたから良かったけどよ……」

また知らない単語が出てきた。『ミカ』はヒトの名前だと思われる名称だからいいとしても、『テティ』と言う花の名前は聞いた事が無い。私が考え事をしていると、エミリアが眼を鋭くさせながら声を上げた。

「ミカ？　誰の事言ってるの？」

エミリアの疑問も尤もだが、目の前の男はエミリアの答えに対して子供でもわかる様な問題に答えられないモノを見る様な顔つきで呆然としている。何がおかしいのだろうか？

「はぁ？　何を言ってるんだ、自分の事なのに……ああ悪い悪い、今はまだ見えてなかったんだよな！！　見えてないものを認めろって言いすぎたわオレ！！」

すると男は勝手に自己完結して答えをはぐらかす。すると彼は話をするのにも飽きたのか私に向かって声を上げた。

「ああ、エミリアは俺が責任を持って連れて帰る。だからテメエはココでのた打ち回ってろ、安心しな殺しはしねぇって」

私を物でも見るかのような眼で腕を上げると無数の武器が姿を現す。武器を見ただけでも分かる、あれは強大な武器だという事に！！

「さぁて、このチート宝具『王の財宝』の力を見せてやるよ！！」

男が指を弾く音が響くと同時に武器が弾丸となって私に襲い掛かってきた。私は手にしたイグニスでそれを捌くが、しばらくするとイグニスの方にも限界が訪れたのか刃を形成しているフォトンが消えうせてしまう。

「イグニスのリアクターまで！？　よりによってこんなところで！？」
「ヒャッハァ！！　武器が釈迦になっちまったようだな！！　オレの宝具はまだまだ弾切れにゃ程遠いぜ！！」
男がそのようなことを言って私に向かって武器の弾丸を投げつけて私を壁の方へ吹き飛ばし、ついでに剣が弾丸となって私の両腕を縫い付ける。
「ぐっ！！」
「ギュスターヴ！？」
エミリアがパニックになるが男は私に近づき、左腕に刺さった剣で私の傷口を抉ってくる。
「――！！」
「はいおしまいっと、テメエ殺したらあのスタリティアと同じ目に遭っちまうからこの辺で勘弁してやるよ。良かったな、オレが優しすぎる奴でよ？」
今もなお傷口を抉るお前が優しいだと？　これで優しかったら『優しい』と言う概念自体が疑われるのがオチだ。
「ま、これでオレがこの物語の主人公になるって訳だ。エミリアもナギサも女連中はオレが幸せにしてやるから、ここで一生過ごしてな。運がよければ誰か来るって、多分な」
もう興味を失ったのか、奴は私に後ろを向ける。私が武器を失ったからといって後ろを向くとはなんて愚かな行動を取ったのだろう。
私は即座に右腕のナノトランサーからカードを1枚取り出す。そ

のカードを見た私は小さく声を紡ぐだけにとどめた。
「出ろ、ダーク・リゾネーター」
そう言って姿を現したのは私が子供の頃から愛用しているカードであり、私が使用していたシャドゥーグのモチーフとなったモンスターだった。暇な時には周囲の目が無い時にこのカードを実体化させ、実体化や同調の練習にも付き合わせた程だ。
私が右腕を見てからリゾネーターに目を向けると、即座にリゾネーターは頷いて右腕に刺さった剣を引き抜こうと躍起になって汗を出しながら行動した。
剣が抜け落ちて右腕が自由になると、即座に右腕で左腕に刺さった剣を引き抜く。抉られた痛みからか激痛が走るが音が響いたのか男はこちらを見て驚いていた。
「テメェ！！　どうやって剣を抜いたんだ！？」
「勝手に抜け落ちたんだろう？　私のせいにするな！！」
リゾネーターは剣に押しつぶされていたが抜けた時点で消しているため、姿は見えていないだろう。私は抜いた剣を握り締め、男に襲い掛かった。
「おい！！　勝手に人の宝具を使ってんじゃねぇぞ卑怯者！！」
「だったら人を突き刺す道具にしなければいいだけだろ？　私のせいにするな！！」
片手で持てる細剣の様な剣だったのが幸いしたが、もしこれが両手剣だったらまずかった。今私の左腕は傷口を抉られていてまともに動かしたり握ったりできる状態ではない。
「くそっ！！　なんだって言うんだよ！？　エミリアにはニコポもナデポも通用しねえし、なのはやネギまゼロ魔は転生できないっ

て言われて、しゃあねえからココにきたら既に主人公の座は埋まってるし！！　ココで負けたら転生した意味なんかねぇじゃねえか！！」

喚きながら剣や槍の弾丸を放つ男。しかしエミリアが横からフォイエを男に放つと、それを避けれずバランスを崩す。

「なっ……テメ……なんでオレを攻撃したんだよ……！？」

「いきなりあたしを口説こうとしたアンタより、ギュスターヴの方が信用できただけよ！！　そもそもあんな状況でにこやかに笑ってくる奴なんか信用できるか！！」

エミリアが作ったチャンスを無駄にはしない。私はすかさず男に接近し、突き刺そうとした。

「甘いんだよ！！」

だが男は両手剣を取り出すと私に向かって振り下ろすが私はそれを横に避ける。そうなれば後は互いに細剣を振るうだけの間合いだった。

「はっ！！　たぁっ！！」

私は一族の中でも本家に近い出身だったため、嗜みとしてのフェンシングに心得はある。異能がメインであるため基礎しかやらなかったため、あれほどの武器を雨のように放った人間には叶わないだろうとも思っていた。

「くっ！！　くそっ！！」

だが蓋を開けてみれば男は力もあって動く速度も速いが、細剣を持つ構えや残心が素人のそれに近い。まるで強い武器があれば達人に勝てると思っている節もあったし、気のせいかこちらを見下しているという雰囲気にも思える。私は相手の剣先をいなし、起動を逸らして――

「これで止めだ！！」

更に一歩踏み込んで剣先で心臓を貫く。男が仰向けになって倒れると、私は男が手にしていた剣と男が撒き散らした武器の山を拾ってナノトランサーに収納する。当然自分が使っていた細剣も収容しようとしたが既に許容量を超えてしまったので溜息をついた。

「い、いいの？」

追いはぎもしくは火事場泥棒同然の私の行動にエミリアが責める様な声で言い出す。とは言え最近はフォトンの量も減少傾向だし、従来のフォトンを溜め込むカートリッジの製造が禁じられたため、このような実剣の需要は高まっているのだ。闇市で売ってもよし、自分で使ってもよし、多くて困る事は今の様な歪曲空間に収容できる限界量だけだ。

「資源枯渇の影響で、武器とかも無駄遣いできないんだ。イグニスが壊されたのは痛かったぞ」

炎魔竜との攻防で破壊されたツインハンドガンやシャドゥーグは必要経費だと割り切るが、目の前の男に破壊されたイグニスは予想外の出費になる。幸いデータは無事だから後でＭＡＷ社に提出しておこう。

「そ、そう言うもの……？　まさかＳＥＥＤ事変とかでもやってたんじゃ……」
「やってたが？」
そもそも死人に金銭や武具は必要あるまい。それが大金や強い武器なら尚更だ。事後処理などで提出するものはともかく、それ以外のものは物々交換で交渉する道具にもなる。
「……本当にアンタって傭兵なんだね……」
「生きていくためだからな……」
私たちはスポンサーが居たからまだマシだったが……と心の中で呟く。ここに居ても意味は無いので脱出させてもらおう。
だがそう思った矢先の事、私は信じられないものを見た。エミリアも私の雰囲気に気付いたのか、私が見ている方を見ると同じ様な表情を浮かべる。
「え……うそ？」
彼女の言葉も頷ける、何せあの男が立ち上がっているのだから。私はあの時確かに心臓を貫いたのだから生きているはずは無い。だが目の前の男は怒りを露にした表情でこちらを見据えていた。
「あークソッ！！　テメエ、オレの宝具何勝手にかっぱらってんだよ！！」
「何故だ！？　ＳＥＥＤフォームですら致命傷を負わせたら消滅した！！　なのに何故お前は生きているんだ！？」
男の怒りも聞こえず私は狼狽していた。当然だ、心臓を貫かれて生きている生命体は存在しないし、キャストですら中枢部を射抜か

れたらそこでおしまいだ。なのに目の前の男は生きている、どういうことだ！？

「バッカじゃねぇの！？　誰がんなこと教えるか！！　オレから主人公の座だけじゃなく宝具まで奪おうたぁいい度胸してんじゃねぇか！！　オレを本気にさせたこと、後悔するんだな！！」

そう言って男は再び武器の弾丸を放つ。私はエミリアを投げ飛ばしたものの、今度は腕を縫い付けるだけに留まらず武器の弾丸は私を飲み込んだ。

「――！！」

不意に地面に倒れこむ。左腕と両足の感覚が無い。視界が紅く染まる。上手く呼吸が出来ない。誰が何を言っているのか聞こえない。

（私は……死ぬのか……）

意識が朦朧とする中、私はそんな事を思っていた。せっかく炎魔竜のカードを手に入れたというのに、ここから出る事も叶わず終わりを迎える事になるのか？　一度も炎魔竜の使わずに私はここで朽ちる事になるのか？

（ふざ、けるな……）

そう思った瞬間、心臓が激しく脈打つ。自然と私の腕は何枚かのカードを探り当てていた。幸い奴は私に興味を失ったのか、エミリアの方に近づきなにやら話し込んでいるが、当の彼女は怯えたままだ。

奴の目線が私から離れている以上、好機は今しかない。

（……バイス・ドラゴンを特殊召喚し……ダーク・リゾネーターを召喚する……）

私は探り当てたカードに描かれた魔物を召喚し、千切れかけた右腕を高く掲げる。

（レベル５の……バイス・ドラゴンに……レベル３……ダーク・リゾネーターをチューニング……）

それは先程私が紅騎士を宿すのに用いた異能の中でも最強の術でもある同調。だが今から召喚するのはそれではない。その証拠にあの時は緑色の星と輪だったものが、今回は赤い火の玉と火の輪となっている。火の気配を感じ取ったのか男が驚いた表情でこちらを見据えるがもう遅い。

『王者ノ鼓動、今ココニ列ヲ成ス……天地鳴動ノ力ヲ見ルガイイ……』

私以外の存在の声が唯一感じ取る事が出来る魂に響く。恐らく炎魔竜のものだろう声と同時に炎の玉と輪が私の身体を飲み込む。

『我、今ココニ復活セリ！！　炎魔竜レッド・デーモンズ・ドラゴン！！』

炎が吹き荒れると同時に私の身体も変質していく。肉体が炎魔竜

の身体となり、爪も鋭く伸びる。米神から角が生え、背中から悪魔の様な翼も生える。エミリアの驚愕する顔と男の癇癪を起こした顔が見える。特に男はありえないものを見ているかのような表情となっている。

「な、何で２５０円竜が、遊戯王のカードがファンタシースターの世界にあるんだよ！？　しかもなんで融合してんだよ！？　あれか！？　遊戯王じゃよくある事だって言いたいのか！？　だったら融合なんかしねぇでハーレム要員のブラマジガールや霊使いをだしゃいいじゃねぇか！！」

人間サイズに縮小された炎魔竜と化した『私』はかつて炎魔竜が行った様な腕に力を込める動作をする。男の背後から武器が再び姿を現す。

だが遅い。

『アブソリュート・パワーフォース！！』

武器が出される前に私は腕を振るい、男を掴み上げる。そして男を放り投げて柱に叩きつけると、歪曲していた空間も消滅して武器は地面に落ちる。

（エミリアは……ああ、無事か。それに眠くなってきた……兄上には悪いが私はここまでか……それでも、あいつのせいで死ぬよりかは、いい結末だな……）

自分の近くで驚愕の表情を浮かべるエミリアを見据え、彼女の無事を確認したところで安堵した時、私の中の“ナニカ”が切れ――

あたしは先程の戦いを呆然と見据えていた。自分を庇ったギュスターヴに致命傷を与えた男が、何事も無かったかのように笑顔を浮かべながら自分の頭をなでようとした時、ギュスターヴの身体が炎に包まれると以前戦った炎魔竜の姿となって男を襲う。

男は武器の弾丸を放とうとしたがそれよりも早くギュスターヴ……いや、炎魔竜が男の顔を掴み上げ柱に向けて投げつける。それで戦いは終わり。ギュスターヴは元の姿に戻って地面に倒れこんだ。

両足は無く、左腕は肩から千切れている。右腕も倒れた衝撃で肘から先が完全に千切れ、身体から離れている。

貴族の様な服も黒地に赤いのか赤地が黒いのか分からないくらい変色しており、金髪も紅く染まったりしている。

明らかにギュスターヴは息絶えていた。

「ねぇ、起きて……起きてってば！！」

声をかけているが身動きも言葉も出さず、声が虚しく響くだけ。
いや、後ろの方で誰かが立った様な音がした。

「なんで……？　何で皆あたしをおいてっちゃうの……？　あたしを一人にしないでよ！！」

しかしそんな事よりギュスターヴの惨状のせいであたしは涙で滲んで目の前が見えない。後ろから無数の武器の弾丸が迫る音が響く。

「誰か！！　誰でもいいから……」

武器の弾丸があたし達を飲み込まんとした時――

「助けてよぉぉぉ！！」

そしてあたしは目の前が真っ暗になった。

太陽の様な黄金の輝きが武器を包み、構成を分解していく。発生源となったエミリアから幾何学模様のような痣が浮かび上がり、背には太陽の様な光輪が姿を現す。

その光輪から放たれた光は周囲を飲み込み、自分達の周囲にいた存在を消滅させる。そしてエミリアは……否、エミリアの姿をした『ナニカ』は彼女の口を借りて囁いた。

『あなたを……死なせはしません……！！』

その言葉と同時に“彼女”は腕をかざし、ギュスターヴを黄金の光に包ませた――

「……クソッ！！　どうなってやがる！！」

俺は脇腹を手で押さえながら通路に座り込んでいた。俺の傍らには緊急チームのメンバーになったバスクとか言うキャストの治療を受けながら吠える。

『この治療が終わり次第、俺は奴の後を追う。アイツは危険だからな』

バスクも無事じゃすまねえ状態だがな。とは言え奴の狙いはあのバカ……いや、家の会社の乗っ取りだって事は知っている。本音を言っちまえば今こうしている時間も惜しいぐらいだ。

『……すまない、一刻も早く追いたいのはお前の方だったな』

「んな面すんじゃねぇよ……」

奴のせいで俺の過去を知っちまったバスクがすまなさそうに顔を逸らして言うと、溜息を吐くしかなかった。

事の始まりは俺が……いや、タダ飯喰らいのバカを含めた俺たち

が海底レリクスの調査の依頼を受けてランク別の依頼を調達しに依頼者の元へ向かっていた時からだ。

俺は奥深くにある“レリクスの遺物”の回収、あのバカには初心者にも出来るレリクスの生態系の調査を受けさせようとした時に地震が起こった。意外と大きく、俺も思わずバランスを崩しちまったもんだ。

昨日の酒が残ってたのかと考えていたんだが、今はそんなことはどうでもいい。今は依頼の調達が優先だ……そう思った矢先、後ろの方からドタバタと走る音が響いて振り向いたら逃げるヒトの群れがあった。俺を押しのけて一斉に喋りだすから五月蝿いの何の。

で、要約すると地震があってレリクスが起動、扉が閉まりそうになったから一斉に走り出した……と言うわけだそうだ。その結果、何人かがキャンセルだなんだとかで騒ぎ出してココから離れちまった。

そん時は『ギャラが増えるぜラッキー』程度だったが、傭兵の数が少なくなるに連れて俺はあのバカがいないことに気付いた。近くにいたキャストの男……バスクにあのバカの特徴を話した上で聞くと、そいつもパニクったような声を上げた。

更に聞いてみれば取り残されたのはあのバカだけじゃないって事だ。依頼者にその事を話すと、急遽救助チームが組まれる事になった。つっても残ってるのはバスクともう1人……ヒトを見下した様な面をする紫色の髪に古臭いゲームに出てくる様な黒い鎧と赤いマントを着たブチギレそうな野郎とチームを組む事になった。

どうやらあのバカどもは何故か奥に進みやがったみたいで、俺ら

も奥へ向かって行った。奥に行っても奥に行っても追いつく気配がまるで無い。

「あのバカ、何処ほっつき歩いてやがる！！　勝手にウロチョロしやがって！！」

俺はそう叫ぶと同時に死骸を蹴りつける。スタリティアの残骸や原生生物の死骸、罠が破壊された跡を頼りに行動しても追いつきやしねぇ。

『だが2人の実力は高いようだな。こうまで奥に進めるとは並大抵の傭兵では出来ない事だ』

俺は……何故か隣にいた奴もバスクの言葉を聞くと笑っちまった。何せあのバカは碌に働きやしねえロクデナシだ、となるとこの惨状を作ったのはもう一方の方になる。

『そうか……では奥に進むとしよう。ココで休んでいる暇は無い……』

バスクがそう言うと奥に進む。ああ、その矢先だったんだよ。

「あーもう！！　ほんっとに使えねえのんだくれのおっさんにロリショタキャストだなぁ！！　だからオレの事放っておけって言ったのによ！！」

指を弾くと同時に俺とバスクは奴に攻撃されちまったって訳だ。そいつはナノトランサーを複数使ってんのかって叫びたくなるほどの武器の雨を降らせやがった。

しかもアイツは俺の思い出したくもねえ過去を知っていやがった。

その事を話しながら奴は俺に攻撃しやがったし、エミリアたちを自分の物にするってほざきやがったから、ナノブラストを暴走させてまでして奴と戦ったが、あいつは武器をとっかえひっかえしまくるわ、頭を砕いてもすぐに復活するわでキリがねえ。最後にゃ俺らをぶった切ってから奥の方へ逃げやがったってわけだ。

「っつってもよ……奴は何者なんだ？」

俺はそんな事を言いながら立ち上がる。傷は痛むがそんな事なんざどうでもいい。それ以上に俺はいやな事を思い出させやがった奴が気に入らなかった。

『その事を誰かに話したことは？』

「あるわきゃねぇだろ！！　ウルスラとチェルシーにしか言ってねえし、言いふらす様な奴じゃねえ！！」

声を荒げる。一刻も早く追わなきゃならねえって言うのに、アイツが最後に使いやがった黄色の槍のせいで傷が治りゃしねえ。

「行くぜ……」

一歩ずつ足を進めていく。傷口が疼き、回復薬を飲みながら前に

進む。そんなことの繰り返しだった。別の広間で蹲って最後の薬を飲んだ時、俺は目を瞬かせた。

「……は？」

全くもって信じられなかった。傷口が徐々にふさがり、痛みが引いてきたのだ。しかも手足の感覚も元に戻っている。

『どうした？』

「……傷が治ってやがる……どうなってんだ？」

俺自身何が起きたかなんてどうでもいい。今は一刻も早く追うだけだ。即座に走るがあのバカたちの行動が幸いして障害は何もなかった。俺らが別の広間にたどり着くと、そこにはぶっ倒れているあのバカ……エミリアとその近くで倒れている金髪の男、そして――

『どうなっているんだ？　何故奴が倒れている？』

俺らをコケにしやがった野郎が白目を剥いてぶっ倒れていやがった。何が起きたのかわかりゃしねぇがざまあみやがれって言うのが本音だ。一発殴ってやりたかったが、こうなりゃ後は知ったことじゃねぇ。奴が起きあがらねえ内に俺はエミリアを、バスクは金髪の男を担いで逃げ出した。

謎の襲撃者（後書き）

本文のようにこれから敵としてチート転生者が跳梁跋扈します。
後転生者さんがブッちゃけてくれたせいでクラウチの過去をバスク先生が知ってしまいます。
前回登場できなかったミカさんを登場させました。次はようやくリトルウイングにご招待です。

ようこそリトルウイングへ（前書き）

リトルウイングにご招待～～～なお話です。
後主人公の過去らしきものも載せておきました。

ようこそリトルウイングへ

懐かしい光景を見ていた……

それはまだＳＥＥＤ事変が起こる前日の事……

「ガーディアンズだと？　お前がか？」

私を含めた3人と1体が食事をしている中、私は青色がかったボディを持つキャストに向かって声を上げた。その一方では黒髪と白髪、2人のヒューマンが一族の異能に必要不可欠な知る人ぞ知るカードゲームを行っていたが。

『ああ。ま、家って結構協会の上層部と関係深いって話じゃん？　で、協会とガーディアンズとの技術交換がてら俺と姉御が行くってさ』

目の前のキャストがキャスト用の栄養ドリンクを飲みながら声を上げる。

「カードを1枚伏せてターンエンド……っと。姉御って……あの人か……エンドフェイズ時にリビングデッドの呼び声！？　しかも対象はメカニカル・ハウンド！？」

黒髪のあどけない表情の青年が小さく苦笑いして相手の一手に驚愕する中、残った白髪の青年が声を上げた。

「カードを1枚セット、ハンドレス状態のメカニカル・ハウンドでロード・ランナーに攻撃……レオン、テメェ大丈夫なのか？　組

織に入るって事は命令に従えって事だぜ？　今までの様な自由行動は出来ねぇぞ……ガード・ブロックか……しくじったな……」

『テメエに比べりゃ俺はまだマシな方だっての！！　当主には反抗的、協会のお偉いさんとも折り合いが悪い、周囲とも溶け込もうとしない三拍子揃った誰かさんに比べたらよ！！』

私も彼が放った白髪のヒューマンに対する酷評に納得がいったので浅く頷いた。確かに彼の行動は目に余るからだ。それを見たのかレオンと呼ばれたキャストは身体を乗り出して声を上げる。

『だろぉ？　ギュスは話分かるじゃん！！』

「僕のターン、ドロー……レオンさん、ギュスターヴさん、飛鳥だって悪気があったわけじゃないし……カードを1枚伏せてターンエンドっと」

「カール、レオンとアスカの問題だし言い出したのはアスカの方だぞ」

カールと呼ばれた黒髪の青年を嗜める私だったが、ある事を思い出してレオンと呼ばれたキャストに向かって声を上げた。

「とは言えお前、キャストなのに計算苦手だったではないか。アスカの台詞ではないが大丈夫か？」

『あー。まぁ、人には向き不向きがあるって事で』

レオンが顔をそらすとカールが突然頭を抱えて項垂れる、どうやらアスカに軍配が上がったようだ。そんな時、別の方向から声がした。

「あ、ココにいたんだ。皆」

その声を聞いた途端、私とカールは姿勢を正すがアスカとレオンは正そうともしなかった。

「飛鳥！？　レオンさん！？」

カールがそんな2人を嗜める一方で奥から3人の人間が姿を現した。淡い紫色の髪を靡かせる女性ビーストに、ポケットに手を突っ込んでこちらへ向かう男性ニューマン、そして茶色の長髪を靡かせた柔和な笑みを持ったヒューマンが姿を現した。

「今更だよカール。ボクは気にしてないし、こういう反応見せてくれるヒトが欲しかったからさ」

『さすがボス！！　話分かってるぅ！！』

「確かにそうですね。レオっちやアーちゃんはそれが持ち味ですから」

レオンとニューマンの男がそう言うと、女性ビーストが声を上げた。

「少なくともレオンは少し気を引き締めないとダメだろう。あたしとレオンはガーディアンズに行くんだからね」

そう言って目つきを鋭くさせる彼女に対して『ボス』と呼ばれた男は優しく言う。

「ま、そうだね。君の言いたい事もわかるよミサキ」

彼がそう言ってミサキが顔を赤らめる中、私は皆を代表して声を上げる。

「それで用件はなんでしょうか？」
「あ、そうそう。一週間後に同盟締結１００周年記念式典が行われるからコロニーに行く支度してね。仕事とかは開けておくように」
「ああ、お偉いさんとのパーティーか。俺はいつもどおりパスするぜ、そんなもんに出てる暇なんざねえよ」

アスカがそう言う中、ニューマンの男が眠たげに声を上げた。

「ダメですよアーちゃん。今回は全員強制召集されてるんです」
「そそ、ゾディアの言うとおりさ。あの子もその話聞いてすごく張り切ってるんだからさ、君が彼女のために遊ぶ時間も眠る時間も惜しんでる事は知ってるけど……」

コイツ先程までカールとカードゲームで遊んでました、レオンはそう言いたげだったが私の視線を受けて口を閉ざした。基本的に飛鳥がデュエルモンスターズを行うのは誰かに挑まれた時のみなのだ。

「ま、パーティーは美味いものがたくさんだ！！　日頃のタチの悪い異能者狩りも今日はお休み！！　それじゃ皆、コロニーに行く準備ヨロシク！！」

それでこの場の会話は終わり、私たちは各々コロニーへ向かう準備を始めた……

懐かしい記憶も徐々に色あせ、暗闇に慣れた私の目にとって眩い光が差し込んでくる。

「ぐ……む……」

私は思わず右腕で目元を押さえ、上半身を起こそうとする……だがそこで1つ疑問点が起き上がってきた。私の服はMAW社製のスーツ『エスプレンドスカラー』だったはずだ。それが質素なインナースーツになっている。

とは言え上半身を起こした時に見た両足と左腕の存在によって全て吹き飛んでしまったが。あの時私は明らかにその3つの感覚を失っていたはず。特に左腕にいたっては千切れ飛ぶ光景が目に映っていたのだ。

思わず右腕に目を向けるが武器で射抜かれた傷も存在しない。ただただ倦怠感だけが体に残っているだけだ。これは一体……

『オウ、気がついたネー！！』

耳に響く甲高い合成音。キャストのものだろうが、ニュアンスから女性のものであることが分かる。

『始めまシテお客サン。ワタシ、チェルシー。ヨロシクネ』

「……こちらこそよろしく頼む」

周囲を見回すとそこは医務室か何かなのかベッドが周りにいくつか存在し、私は声の主であるチェルシーと名乗ったキャストの方を見据える。

黄緑色の髪をした水商売系の服を模したパーツを着込んでいたが、

私の視線に気付いたのかわざとらしく両腕で胸元を隠して身体を捻りながら声を上げた。

『お客サン……見てもいいケド、がっつイテ見るのは感心しないヨー？』

「……すまない……ところでココは何処なんだ？」

私の声に対して彼女は優しく説明するかのように声を上げた。

『リラックスしててイイノヨ～、ココはボッタクリの店じゃないからネ～』

そう言う意味で聞いたのではないのだが……

『お客サンがレリクスで着てた服、ボロボロだったカラ脱がせちゃったノヨ。見かけによらずいい身体つきだったカラお姉さんビックリヨ～』

「少し待ってくれ……服がボロボロだっただけか？　腕とか千切れていなかったのか？」

左腕と両足が千切れ飛んだと言うのに、服だけがボロボロになったのかと言う疑問に対して彼女はやんわりと答えるのみ。

『五体満足大丈夫だったネ。一応ＣＵＢＩＣ　ＳＴＡＲ製の最新ジャケットを用意したケドサイズは大丈夫？　コレはお姉さんからの特別サービスヨ、気にしないで受け取ってネ』

ホラそこと指を指された先には青みがかったジャケットが畳まれてあった。インナーで歩き回る趣味はないし私はそれを手にしてカーテンで彼女の視界を遮ってからズボンを履き、シャツとジャケッ

トに袖を通す。
着替え終わってからカーテンを開けると、チェルシーは商売用のスマイルらしきものを浮かべて声を上げた。
『似合ってるわよお客サン、ワタシ少しクラクラ～っときたヨー。それじゃシャッチョサンガ呼んでるネ。歩けルカシラ？』
ベッドから足を下ろして腰を上げるが、まだ新たに生えただろう両足に慣れていなかったのか思わず膝を震わせてしまい、思わず尻餅をついてしまう。
『ホントに大丈夫～？　ユックリでイイノヨ、お姉さんが教えてア・ゲ・ル』
「……そこまで……心配してもらう必要は……無い……」
男として歩くくらいで甘えるわけには行かないので、無理矢理にでも腰を上げる。そして生まれたての小鹿の様な足取りで私は医務室から出て行った。

何度か転びかけてチェルシーに心配されながらようやくオフィスらしき扉にたどり着くと、１人の男性の声が聞こえた。
「おう、俺だ俺。今すぐ俺んトコまで来い……あぁ？　イヤだぁ

？　甘えてんじゃねぇぞ！！」

どうやら彼の通信相手は機嫌が悪いのか来たがらないようだ。その様子にチェルシーは苦笑いし、私は少し溜息をつく。

近づくにつれて酒の臭いが漂ってくる。酒場にはよく出向いていたがこの臭いにはいまだに慣れないなと心の中で愚痴る。更に水着の女性がモニターに映し出されており、仕事をしていたのかとさえ感じられるほどだ。

「……っと、来たか。その顔だとココが何処だか分かってるようだな？」

髪と髭で顔の大半を隠したビーストが声を上げると私は頷く。チェルシーからある程度の説明……ＭＡＷ社のライバル会社の１つである『スカイクラッド社』が持つリゾート型コロニー『クラッド６』……私はあの海底レリクスからココまで運ばれてきたと言うのだ。

まさかライバル会社の人間に命を救われる事になるとは……私は溜息を吐くしかなかった。

「んなしけた顔してんじゃねぇ。テメエの素性は聞いてるよギュスターヴ、ＭＡＷ社代表取締役グラディウス＝ウィンストンの弟さんだろ？」

『エェ～！？　家のノウハウを盗むタメニやってきたスパイだって言うノ～～～！？　大胆な手で潜入するなんて信じられナ～イ』

彼の言葉に私は息を呑む。一方でチェルシーは驚いた表情で的外れな言葉を出すがそれを彼が制した。

「……お前は知ってるはずだろ。ＭＡＷ社トップの弟の看護を頼むってウルスラからも言われたわけだしな」

『お約束ネシャッチョサン』
「……ああそうかい」

2人の漫才に思わず咳を出して話を促す。態々コレを見せるために連れて来られたのならばここにいる意味は無い。

「クレームが来ちまったな。俺はクラウチ＝ミュラー、軍事会社『リトルウイング』を取り仕切ってるモンだ」
「リトルウイング……来るもの拒まず経歴問わずで有名な傭兵集団……ですか」

異能者の集団といえども表の情報はある程度仕入れている。以前行方不明になった仲間の情報を求め、こういった集団まで調べた事があったのだが結果は不発に終わった出来事を思い出していた。クラウチはそんな私の考えなどどうでもいいかのように言葉を紡ぐ。

「無理して敬語使わなくてもいいぜ。それとお前さんの知っているリトルウイングで間違いねぇぜ。ま、軍事会社といっても肩書きだけでな……やってる事はそこらの便利屋と対して変わらねえよ。要人警護に廃棄プラントの調査とかショボいもんばっかりさ」

基本的に大規模な軍事会社や同盟軍、そしてガーディアンズ等と言った有名所に大規模な仕事を持って行かれてしまっているのが現状だ。それにGコロニーが落下してから、私とウォザーブルグ動乱で行方不明になった2人で自警団の様なものを結成していた時期もあったから、それを大きくした様なものかと自己完結していた。

「で、この前あった海底レリクスの調査にも偶々参加してたって訳だ……」

そこでクラウチの表情が見る見るうちに不機嫌そうになっていき、チェルシーは慌てて声を上げる。

『デモ、そこでトラブルがあったのよネ～突然地震が起こってレリクスの中に閉じ込められたうっかりサンがいたのヨ～。デ、任務もうっかりサン救出作戦に変更って訳ネ』

「ああ、そのレリクス内に閉じ込められたバカなうっかりさんがお前さんって訳だ……」

やはり不機嫌そうな表情を隠さない中、彼が声を上げて瓶を手にして一気に中の液体を飲み込んだ。

「とは言え地震のせいで逃げやがった連中が出るわ、その上急遽組まれたチームの中にクソ野郎が一匹混じっていやがったわ、そのクソ野郎のせいで俺ともう1人が大怪我までしたわで大変な苦労をしたんだがなぁ……挙句の果てにようやく帰って来たらスポンサーまでトンズラと来たモンだ！！」

酒瓶を叩きつけ砕け散った破片が宙を舞う中で怒鳴るクラウチ。どうやら実入り無しの状態で自分を救助してくれたわけだ。

『無理しちゃダメよシャッチョさん。またボスに怒られるわヨ……』

優しくクラウチを嗜めるチェルシーだったが、私は嫌な予感しかしなかった。

「……さて、話を戻すが……お前、俺たちが『お金なんて要らない、君たちの笑顔があればそれで満足さ』とか言う正義の味方に見えるか？」

「いや全く見えないが……」

私は見た感じ正直に言うが、クラウチは若干顔を引きつらせた顔を近づける。正直言うが子供が泣きそうなくらいに迫力があってやはり酒臭い。

「いい度胸してんじゃねぇか、正直な感想をありがとよ……予想通り俺らは常日頃から金がいる傭兵集団だ。スポンサーがいなくなっちまった以上、誰が俺らに報酬払えばいいのかねぇ……？」

クラウチの目は私を見据えている以上、矛先は私しかおるまい。まぁ、私が集めた武器を売り払えばいいか……

「ココまでの運搬代金に目覚めるまでの護衛代金……しかもチェルシーの看護まで含めるとなると１００万メセタ……おっと忘れてた、俺らの治療費や奴らが俺ら以外の傭兵の報酬にスポンサーがトンズラした違約金を含めて５００億メセタになっちまうな……おお怖い怖い」

その報酬と言うには天文学的な値段に私は眩暈を覚えた。武器を売ってどうにかなる金額でもないからだ。ウォザーブルグ動乱以来、不要なカードや調度品をいくらか売って漸く一族が慎ましく暮らせる様になったのだ。もしココで私が断ったらどうなる事か……

「ま、俺らも鬼じゃない。こんなバカ高い金をお前が払えない事は分かってる……だからコイツをＭＡＷ社に請求するさ」

「ま、待ってくれ！！　流石にそれは不味い！！」

思わず身を乗り出して大声を上げるが、周りにいた面々はただ笑うだけで誰もクラウチを窘めようとはしない。確かに自分は金で解

決できれば御の字だという考えを持つが、それでも限度がある！！
明らかにＭＡＷ社は……自分たちが運営している異能者集団は経営難に陥ってしまう！！

「ほう……じゃどうするんだ？　お前さんが家で働いて借金払うって言うのか？」
『田舎のお兄さんも苦労するわヨ～、ココは素直に頷いた方が身の為ネ～』

以前カールがテレビで見ていた、古代ニューデイズをモチーフにした時代劇に出てくる悪代官よろしくの表情を浮かべるクラウチと、彼に寄りかかって負けず劣らずのあくどい表情を浮かべるチェルシー。その顔を見て怒りを覚えたが答えは一つしかない

「……そうするしか、ないだろ……クラウチ……」
「よっしゃ決まりだな！！　言質取ったぜ！！」

諦め半分捨て鉢半分で声を振り絞って答えるとクラウチはあくどい雰囲気を消し去って拍手を打つ。それを合図に他の面々も笑うのを止めて元の位置に戻って行った。

「実はお前の兄貴との交渉は既に済ませてんだ、流石に俺たちもＭＡＷ社と全面戦争する気はねぇよ。報酬の方はＭＡＷ社がスポンサーになったって事で貰ってある。元スポンサー様にはキチンとお礼参りするつもりだがそれは俺の仕事じゃねぇ……後、コレを渡してくれって頼まれてんだ」

その言葉に私は思わず脱力するが、兄の書状を受け取りそれを見据える。それにはこう書いてあった。

＞＞しばらくお前に仕事を言い渡せないからリトルウイングで世話になるように。一応クラウチ氏には仲介屋を通して仕事を依頼するので、仲介屋経由だったらＭＡＷ社からの依頼だと思ってくれ。
グラディウス＝ウィンストン＜＜

恐らく異能を悪用する連中や以前属していた“協会”が残した不始末の処理で忙しくなるのだろう。そこで私を救助したリトルウイングに白羽の矢が立った……そう思う事にして自分自身を納得させた。

「ま、本当は入社試験があるんだが、そこはＭＡＷ社から推薦状代わりにお前の経歴を見させてもらったぜ。Ｇコロニー落下事件までＭＡＷ社の私兵集団に所属、その事件でリーダーが死んでから残った仲間と一緒に自警団を結成……戦闘要員僅か３名の超少数精鋭でチーム名ともなった『三騎士（トライリッター）』とか言う経歴があるんだ……テメェら一応グラールの一部じゃ都市伝説みたいな事んなってんだぜ？」

一応試験はあるのか……そう思った矢先、クラウチが言葉を進めた。

「当然試験なんざ必要ねぇ即戦力だ、更に今ならいないよりマシ程度の自分色に染められるパートナーつき！！　いい条件だろ？」

彼がそう言った矢先、扉が開く音がする。開いた扉から入ってきたのは、あの海底レリクスで行動した少女・エミリアだった。

「……あのさ、おっさん。今日ぐらいカンベンしてよ……あたしがどういう状況だったか知ってるでしょ？」

そんな彼女もやる気も無い仕草でこちらに向かってくる。表情は

暗く目の下には隈が出来ていた。

「知らねぇし興味もねぇからカンベンしねぇよ。んな事よりお前、客の前でそんなツラするんじゃねぇ」

クラウチの声に対してエミリアは私の方を向く。最初こそ始めましてと言った彼女だったが、しばらくして私の顔に見覚えがあったのか驚愕の表情を浮かべ――

「え……えぇ！？　えぇぇぇぇぇ！？」

正に幽霊でも見たかの様な声を張り上げた。まぁ、私自身も驚いているわけだが……

「い……生き……てる……？　……なんで、生きっ……生きてるの！？　何で？　どういう事！？　ギュスターヴにおっさん！？」

「私にも分からん」

「勝手に人を殺してんじゃねぇよ……お前、ホント適当な事しか言わねぇな。お前、ヘマしたらとんでもねぇ事んなってたぞ」

私達からの攻撃に思わず沈むエミリアだったが、彼女はとんでもない事を言う。

「生きてたこと教えてくれなかったおっさんには頭にきたけど……でもよかった……よかったぁ……あたしも気を失ってて、気がついたらココの医務室にいたしさ……」

彼女は私が“生きていた”事に安堵したのか、とんでもない事を口走り始めた。

「あそこで起こった事って、全部夢だったんだ……そうだよね、心臓刺されても死ななかったり、モンスターが実体化したり人と融合したりするなんて夢に決まってるよね……最近遊戯皇見てないんだけどな……」

その言葉を聞き私とクラウチは思わずエミリアをにらみ付けた。彼女の中では『夢の中の出来事』だと自己完結しているが、それでも私達の秘密を堂々と話されてはたまった物ではない。

「夢の話は後にしておけ！！　それはともかく、お前らやっぱり知り合いだったか……よーしよーし、思った通りエミリアも懐いているみたいだし好都合だな」

「思った通り？　好都合？」

「……まさか！！」

エミリアは首を傾げていたが、私は思い当る節があったのを思い出す。あの時彼は試験も無し、パートナーつきだと言っていた筈だ。恐らくクラウチが言うパートナーの正体は……

「ああエミリア。一応紹介しておくがこいつはギュスターヴ、うちの会社の理念に共感して喜んで社員になってくれたぜ」

「……またいつもの悪代勧誘？　まぁ、コイツが有能だって事はあたしも知ってるけど……」

彼女は私の方を見てから胡散臭げな表情でクラウチに向かって言う。

「骨折ったもんだ。試験免除にいないよりはマシ程度のパートナーをつけるって条件を出す事んなっちまったからな……」

本当は身内にとんでもない請求書を送りつけると脅されたからなんだがな。しかもそれは実質騙まし討ちに等しいものだったが……

「へぇ～めずらしく太っ腹だね～」

エミリアの発言に対してクラウチが呆れ返ったかのように腕を組んで声を上げた。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まってんだろ」

やはり彼の言うパートナーとは私の思ったとおりの人間だった様だ。一方でパートナー認定を受けたエミリアが驚愕の声を上げる。

「ええっ！？　おっさん！！　勝手にパートナーとか決めるな！！　少しはあたしの意見を……」

「……ほぉ、お前それはつまり1人で働きたいって事か？」

その問いかけにエミリアは思わず口を閉ざしてしまう。更に彼は私たちに向かって声を上げた。

「さてギュスターヴ、実はお前さん用の部屋を既に用意してある。エミリア、ぼさっとしてないでコイツを案内してやれ。パートナーなんだから仲良くな」

彼の有無を言わせない言動にエミリアも遂に折れたのか、項垂れて声を上げた。

「はぁ……分かったよ。それじゃ、あたしは先に居住区の入り口に行ってるから……」

そう言って彼女は諦めてとぼとぼとオフィスを後にした。クラウチが慌てて声を上げるがもう遅い。

「あのバカ……案内する奴ほっぽってどうするつもりなんだよ……それに返事ひとつマトモにできねぇのか、アイツは」

そう言われるとバツが悪い。だがそこでチェルシーが声を上げた。

『シャッチョサン、怖い顔するからネ。もっと優しくしてあげるとイイヨー』

彼女の言葉を持ってしても、クラウチには届かない。

「何でロクに働きもしねぇ社員に優しくしてやんなきゃいけねぇんだよ。な、ギュスターヴ……お前もそう思うだろ？」

私にいきなり話を振らないでくれ。とは言え海底レリクスではあまりに耳を疑う言動を発していたのも事実な訳だ。

「まぁ……確かに働いてくれと言うのが本音だな……」

「そうだろ。やっぱお前さんは分かってやがる。あんぐらいのガキは甘やかすとつけあがるから厳しすぎぐれぇが丁度いい」

「それでも言わせて貰うが……流石に仕事中に酒を飲んだりグラビア写真を見たりするのも、子供からしてみれば『お前が言うな』としか言えないが……」

彼女曰く『悪代勧誘』に対する嫌がらせ代わりに言ってやる。だがそこでクラウチが不機嫌そうに声を上げた。

「あ？　まさかテメェ俺とエミリアが親子関係だと思ってるのか？　勘違いしてるようだから予め言っておくぞ。俺とエミリアは、家族でもなんでもねぇ……ただの上司と部下の関係だ」

上司と部下を強調するかのように言うが、チェルシーはそんな彼をたしなめるように言い放つ。

『そんな、ツレナイネー。シャッチョサンは、あの子の保護者でもあるのに……』

「……ツケの代わりに、お前共々押し付けられただけじゃねぇか。泣く真似止めろ、またクレームつけられるぞ」

ハンカチ片手に泣く真似をするチェルシーにクラウチは呆れながら頭を抱えた。

『資源枯渇のせいでお店がつぶれる直前まで来てくれたの、シャッチョサンだけよ～。私とエミリア、引き取ってくれて感謝感謝ネ。もし引き取ってくれなかったら私たち悪いオジサンたちに身売りしてたヨ……』

「……それで？　いい加減こっちも暇ではないんだが……」

流石にこれ以上三文芝居を続けられると呆れより怒りが強くなってくる。私の怒りに感じたのかクラウチが大きな声を上げた。

「と・も・か・く！！　俺とエミリアは家族なんかじゃねぇ！！書類上俺はエミリアの保護者になっちまってるってだけだ！！そうじゃなかったら、働かねぇ五月蝿いだけのガキなんざとっくに放り出してんだ！！」

『仕方ないヨー。最初は誰でもわからない事だらけヨ……皆が皆、最初から強いわけじゃないもんネー。あの英雄イーサンだって始め

てテクニック見た時はビックリ仰天驚いたのヨー』

確かにそうだが、キャストはカタログスペックではないか？

「まぁ、アイツの過去とかはどうでもいい。正直そんな事に興味は微塵もねぇしな」

そのことに関しては異議を覚えた。人の過去はある程度は知っておいた方がいいと思うのがウォザーブルグ動乱の顛末を聞かされた時に思ったことだ。確かに地雷を踏む可能性は在るが、知らずの内にとんでもないものを踏まされるよりかは遥かにマシだ。

「まずお前さんがやる事はエミリアのお守りだ。タダ飯喰らいじゃなくなる程度に鍛えてやってくれ。それでいい、後はお前の好きにしな」

話は終わりだと言わんばかりに席に座るクラウチ。それを見たチェルシーが私に向かって声を優しく上げた。

『シャッチョサンはああ言うけどエミリアはいい子ヨ』

まあ、あれで悪党だったら私も即座に人間不信に陥るから彼女の言葉には首を縦に振る。それを見た彼女は顔を明るくさせて声を上げた。

『仲良くしてもらえると、ワタシもウレシイ、あの子もウレシイ、皆ウレシイ。お客サン、エミリアは居住区の入り口でお待ちヨ……レディを待たせちゃいけないネ』

彼女の言葉に後押しされて退出しようとした時、突然クラウチが

私を呼び止めた。

「ああそうだ。アイツは夢だと思ってたから渡せなかったんだよ、コレお前さんのだろ？」

そう言って彼は3種類の物を私に手渡す。まず一つ目は私達の本来の武器であるデュエルモンスターズのカードで私が入手した『レッド・デーモンズ・ドラゴン』、続けて赤と黒で彩られた私のナノトランサー、そして……

「この細剣は……」

最後は私が収容しようとして結局出来なかった細剣だった。クラウチはそれを見据えて声を上げる。

「お前さんの近くに転がっていたんだ」

私は首を横に振るう。元々この細剣はあの男が使用していた武器であり私のものではない。しかしクラウチは無理矢理私に押し付けようとした。

「違うのか？　コイツは俺やバスクのモンじゃねぇし、デザインだってエミリアの趣味でもねぇ。となるとお前さんのモンだって言うのが俺の推理だ」

どうやら彼はこの武器を無理矢理にでも私の物にしようとしている。イグニスを筆頭とした武器が破損ないし破壊されてしまった以上、私の武器はシールドしか存在しない事になっている。

「仮に違うとしてもだ。持ち主がここにいない以上誰のものでも

ないが俺らはいらねぇし、エミリアじゃ使えそうにねぇ。つう訳でコレは今日からお前のもんだ」

この細剣は軽いし貫通力もある。捨てるには惜しいし、何故か手に馴染んでいる。炎魔竜とは比べ物にならないが私がコレを欲してしまっている以上、断る理由は無い、か……

「……まあいい。くれると言うのならば貰っておく」

あのような悪質な勧誘を受けたのだ、敬語を使う気など礼を言うためであろうと失せている。クラウチの方は厄介払いが出来たと思っているのか嬉しそうな表情をしていた。

私は細剣を腰に備え付けるとこの場から立ち去っていった。

「さて、居住区だったな……」

だが腑に落ちないことも在る。炎魔竜も腰に据えた細剣も現実に存在するが、不思議な事にナノトランサーの中にあった武器は全て幻だったかのように消えうせていたのだ。しかしこの細剣だけは消えずに今も残っているのだ。

（……そうなると夢ではないのか……？　それにしては両足や左

腕が生えている事は……いや、そもそも今こうしている事すら……）

『む、お前は……』

私が考え事をしている中、聞き覚えの在る男性キャストの声が響いた。細身のパーツにフルフェイスメット……海底レリクスに訪れた際に会話をしていた傭兵だった。

「確か……私と海底レリクスであったな……」

『覚えていたか。俺の名はバスクだ。クラウチから名前は聞いているぞギュスターヴ、ここにいるということはお前もリトルウイングに入ったのか？』

入ったと言うか入らされたと言うか……答えに戸惑っていると、バスクの名に聞き覚えがあったので問いかけた。

「すまないが私達を海底レリクスから救助した『バスク』とはお前か？」

『……ああ、俺の事だ。レリクスでの救助活動と突然攻撃してきたヒューマンとの戦いが縁でクラウチにスカウトされてな』

やはりあの男と戦った事は夢ではないか。そう考えているとバスクが周りを見て声を上げた。

『入社するまでの経緯は問わずと聞いていたから、どんな奴らがいるのかと思っていたが……それほどひどい状態ってワケでもなさそうだな』

確かに言われてみれば周りを見ても、周りにいるのは荒くれ者だと思われるが一日中喧嘩をしているような奴らばかりではないとい

うことか。

「確かにそうだな……問題は取り仕切っている筈のクラウチの行動ぐらいか……」

昼間から酒は飲むわグラビアは見放題だわ問題しかない。特にあの勧誘を思い出すだけで怒りが込みあがってくる位だ。

『……』

だが私の怒りとは他所にバスクは何か別のことを考えていた様に見えたが、声をかけると直ぐに嗜める様な声を上げる。

『そこまでだギュスターヴ。俺たちは雇われの傭兵よろしく仕事に精を出せばいいし、タダの酔っ払いならとっくの昔に解雇されている筈だろう？　クラウチだってここにいる以上実力はある方だぞ？』

そう言えばこの男はクラウチと共に行動していたはずだから実力は知っている訳か。確かに言いすぎだったかもしれないな。

『まぁ一緒に仕事をする機会もあるかも知れんが、そのときはよろしく頼む』

「こっちもだ。ではな」

バスクと別れてしばらくすると今度は横から女性に声をかけられた。赤い扇情的なコートを着ている青い髪を靡かせた右目を隠している女性ヒューマンだ。

「見ない顔だな……と言う事は久々の新入社員か……しかもその

顔から見ると、クラウチとチェルシーが悪代勧誘をやったようだな」

その事を聞きげんなりとする。目ぼしい人間には毎回コレをやっているのかとも思えた位だ。

「あれはなんなんだ？　訴えられても文句は言えないと思うが……」

「あれは既に引き抜きの契約を済ませてある傭兵に対する冗談みたいなものだ、気にする必要は無い」

言ってもいい冗談と悪い冗談があるのは当然の事だと思うのだが……あれが冗談だとは初耳だったぞ。

「おっと自己紹介が遅れたな。私の名はクノー、リトルウイング所属だから君達の先輩に当たる」

「……ギュスターヴ＝ウィンストンです。若輩者の身ですが、これからよろしくお願いします」

そう言って互いに握手する。握手が終わったところでクノーと呼ばれた女性は目つきを鋭くさせて声を上げた。

「ココは入社までの経歴が問われない反面、入社後の実績で全てを評価される完全な実力主義の会社だ……」

なるほど、それで性根の腐った連中は軒並み排除されていると言うわけか。私は一応推薦状代わりに経歴を問われたわけだが即戦力だからいいと言う事になったのだろう。

「ああ、腕に自信が無いのなら早々に去った方がいい。そして自信があるのなら好きにすればいい」

「……一応コレでも少数精鋭の自警団のメンバーを務めていましたので自信はある方です。私が逃げれば残った2人の名を汚す事になるので……はい分かりました等とほざいて逃げはしない……」

最後の方は地を出して声を上げる。それを知ったのか彼女も小さく笑った。

「ふふ、今のは軽い脅しだったんだが、全く動じていないどころか反論までするか……流石は伝説の『三騎士』といったところか？まぁ君が私と敵対しない限り、私は君の味方だ。いつでも話しかけてくれ」

互いに会話を終えると私は漸く居住区の方へ差し掛かる。入り口を潜り抜けるとマンションの入り口フロアのような空間が広がっており、エミリアはソファーの背もたれに背を預けて眠っていた。

「エミリア。遅れてすまなかった」

「……あ、やっと来たの……んじゃさっさと終わらせるわよ……」

エミリアが目を擦りながら言うと、ソファーから立ち上がって移動を始めた。私も後に続き転送装置にたどり着く。

「ホイホイッと……」

エミリアが装置を操作すると、私達の身体は扉が並び立ってる廊下へ移動してその中の1つを開けて私たちは入る。質素だが落ち着ける部屋だ……まあ、家具がベッドとビジフォンを置いてある机しかないのは今まで誰もいなかった部屋だからだろう。

「……あ、一応会社から支給されてるパートナーマシナリーもリ

クエストあるなら今日中に言っておいてね。ルームグッズとかもスタイルショップとか生活用品店に行けばあるから……シャワー浴びたかったらドレッシングルームに備え付けられてるのがあるから」

「了解した」

「んじゃ後はテキトーにやっててね……その間あたし休んでるから……ふぁ～～～ぁ……」

そう言って彼女はベッドの上で眠り込む。掛け布団を彼女に被せると私はドレッシングルームへ向かい、鍵をかけた後で服を脱いだ。

（……）

備え付けられているシャワーを使い冷水を嫌と言うほど浴びながら私は考え事をしていた。

今日の……いや、昨日かも知れないし一昨日かもしれない海底レリクスの調査を思い出す。

彼女は夢だと言っていたが炎魔竜が封じられたカードもあの細剣も実在している。クラウチの表情から察するに恐らく彼もバスクと共にあの男と戦っていたのだろう。よってあの男も実在している。

（どういうことだ……）

エミリアは夢だと思っているようだが証拠物件と証言がある以上

現実だと確信している。だが彼女の言葉に対して納得している自分もいるのだ。
何しろ彼女の言葉を裏付けているのは……他の誰でもない私自身なのだから。流石に冷たくなったからシャワーを止めて置かれてあったバスタオルで身体を拭く。
（左腕はある……両足もある……）
拳を強く握ると痛みが走る。
（痛みがある以上、夢ではない……）
チェルシーから渡された服に着替え、私は今も眠っているエミリアを横目で見据える。
（彼女は私と面識がある……彼女にとって何処までが夢なんだ……？）
彼女にとって全てが夢ならば私の事を『夢の中の人間』と言う可能性があった。だが私は現実の人間だ、フィクションの存在ではない。
考えれば考えるほど分からなくなってきてしまう。出口の無い迷宮に迷い込んでしまったようだ。
（……考えるのは止めよう……バスクの言葉を借りるわけではないが、私は雇われの傭兵だ……命のあっての物種……それで十分だ……）
自己満足だといわれるだろうが、そう考えるしか突破口はなさそうなのだ。さて、そう結論付けたら後はＭＡＷ社にイグニスのデー

タを届けなければならない。

私がそう思って部屋から出ようとした瞬間――

『待ってください……』

そんな声が耳に届くと、私は思わず声がした方向に振り向く。しかしそこには誰もいない。この部屋には私とエミリアしかいない事は、彼女が鍵を開けたことで確認されている。

更に言えば声と口調はエミリアの物ではないし、当然だが私のものでもない。パートナーマシナリーはまだ支給されていないから動かないし、私がＭＡＷ社で使っていたのは遠距離主体の戦いを補うＧＨ４９４型だ。

鼻を擽ったのはあまりにも心地よい匂いを持つ花の香り……この

花の匂いを嗅いでしまえば、今までの花が意味も無いモノになってしまうのではないかとも思えるものだった。
そしてもう1つ……

「エミ……リア……？」

先程まで眠っていたエミリアが宙に浮かび上がっており、彼女の顔に幾何学的な文様が浮かび上がっていたのだ。そして彼女から金色のような輝きが放たれると、それが一箇所に集まって1人の女性の形となった。

流れるような金髪。
露出度が高い服に豊満な肉体。
背に太陽のような光輪を背負い、そこからも溢れる輝き。
そして何よりも……全てを慈しむ様な優しげな表情。
正に『理想の女性』とも言うべき存在がエミリアの体から姿を現していた……

ようこそリトルウイングへ（後書き）

クラウチがやったような冗談は止めておきましょう。話が通じなかったら洒落じゃすみません。後バスクとの会話を原作から変えてみました。

ギュスターヴのＰＭは……先にも書いてるようにアレですのでｗｗｗ

そう言えば皆さんが思い浮かべるチートって他にどんなものがあるのでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3100x/

傭兵と決闘者の協奏曲

2011年10月27日01時10分発行